新定女子國文

巻三

375.9
Yo19
資料室

42242
教科書文庫
4
810
42-1928
200030
1550

昭和三年二月二日
文部省檢定濟

新定女子國文 卷三

吉田彌平編

金港堂書籍株式會社

資料室
375.9
Yo19

廣島大學圖書之印

広島大学 教 14781 図書

新定女子國文・卷三

目次

一　天皇陛下の御幼時……石井國次……一
二　十二德（昭憲皇太后御歌）……一〇
三　この春……北原白秋……一四
四　九官鳥と鶯……土岐善麿……一九
五　師の君に……村山もと子……二四
六　吉野……田山花袋……二七
七　朝の庭……高濱虛子……三四

八 老僧の接木……室鳩巣……三八
九 波に咲く花……吉江孤雁……四〇
一〇 紅椿……三木露風……五二
一一 樂園……中村吉藏……五四
一二 堪忍……柳澤淇園……六四
一三 若葉の雨……薄田泣菫……六八
一四 優曇華……横山桐郎……七四
一五 村の哀愁……白鳥省吾……八五
一六 松平信綱……新井白石……九一
一七 蜀山人の盆燈籠……饗庭篁村……九四
一八 獨逸の夏の家庭……名倉聞一……一〇〇
一九 星……室生犀星……一〇九

二〇 故郷の山……三宅やす子……一一一
二一 夏の京……近松秋江……一二〇
二二 富士登山……荻原井泉水……一二八
二三 凌霄花……吉村冬彦……一四六
二四 美濃の隱家……岸上質軒……一五一
二五 蟲の音……沼波瓊音……一五八
二六 月見草……相馬御風……一六一
二七 葛飾の秋……中勘助……一六五

帝國大學圖書之印

新定女子國文　卷三

石井國次
教育家
學習院教授

一　天皇陛下の御幼時

石井國次

天皇陛下の允文允武におはしまして、夙に帝王の聖德を具へさせ給ふことは申すも畏きことながら、御幼少の砌、學習院御在學中の御事どもを拜し奉るにつけても、まことに感佩に堪へぬことが多いのであります。

まづ第一に驚嘆し奉るは、御記憶の拔群にあらせられることであります。今まで多くの生徒に接して參りましたが、

陛下の如く御記憶の強い方は見受けたことがありません。蟲の名でも貝の名でも、聯絡も系統も無い事まで、一度御覺えになつた以上は、決して御忘れになるといふことがありません。

此の御記憶の拔群な上に、御研究心が非常にお強く、何でもよい加減にして置く事が御嫌ひで、詳細に御質問になり、又御自分で徹底的に御研究になるのであります。例へば歷史で聖德太子の事を申上げると、御歸りになつて參考書を御調べになり、聖德太子の憲法とはどんなものか、三寶とはどういふ事かと御研究になる。理科で蝶の御話を申上げると、蝶類圖說を御調べになつたり、盛に御採集になつたり

天皇陛下

して、日本產の蝶は勿論、外國產のものまでも御觀察になる。或は電氣の御話を申上げれば、種々の器械を御取寄せになつて御實驗遊ばされ、無線電信・電話の事まですつかり御理解になるといふ風であります。

旅行・登山の御趣味も豐富に入らせられ、單なる御運動としての外に、地圖や案內記をよく御調べになり、其處の產物や、動物・鑛物から氣象の事まで熱心に御研究になる。萬事が斯ういふ風であらせられるから、御知識が確實で且深みがあらせられる事は實に驚嘆し奉る

外はありません。

明治神宮に參拜して明治天皇の日常御使用になつた御調度品を拜觀したものは、誰でも其の御質素なのに感泣しないものは無いと思ひますが、陛下も亦其の御遺傳のためか、御感化のためか、御生來華美が御嫌ひで入らせられます。それですから御學用品等も、全く一般學生と同樣なものを御用ひになり、鉛筆などは、當時一錢五厘の鷲印のを好んで御使ひになりました、而もそれがごく短くなるまで、決して御棄てになりません。

消ゴムも當時四五錢位のものを、豆粒位になるまで御使用になり、御帳面でも半紙や畫用紙でも、決して無駄には遊ばしませんでした。それで大正三年三月陛下が初等科を御卒業あらせらるゝや、御高德を一般兒童に拜せしめたならば國民教育に裨益する所があるだらうと考へて、陛下の御使用になつた背嚢・教科書・雜誌・筆入から、帳面・鉛筆・ゴム、其の他陛下が御製作になつた手工品・圖畫・標本等を拜借して、一室に陳列し、御教室・御控室等すべてを公開して、一週間市内及び近縣の小學兒童に拜觀せしめたことがあります。其の時、毎日何千といふ兒童が校長・教員につれられて參り、私共は手別けをして種々説明を致したのであります。たしか京橋か日本橋あたりの學校と思ひますが、女の子でかなり綺麗な服裝をして幅の廣いリボンなどをつけて來た一

Ribbon リボン

組がありました。私が其の女生徒たちに説明をしてから、「皆さんは殿下さへかやうに御質素であらせられる事を拜見したら、もう立派な着物だの幅の廣いリボンなどを家庭でおねだりが出來ないでせうね。」といつたら、感激して大分泣いた生徒がありました。

陛下は又非常に規律正しいことが御好きでいらせられます。朝の御起床から御拜・御食事・御通學・御復習・御運動・御入湯・御寢まで、實に規則正しい一日の御日課を御守りになつて、御變更になる事は容易にありません。從つて色々の事を遊ばすにも、すべて規律正しい計畫を立てゝ組織的にあそばすといふ御性質であらせられます。

陛下はまた實に公平無私であらせられます。例へば戰爭ごつこをやつたあとで、私が其の審判をし、勝敗をきめ、講評などをする時に、御自分の方に不利な事であつても決して隱す所なく御申出になる。角力で陛下が相手を投げられて軍配が御自分に揚つても、行司の氣が付かなかつた少しの踏切でも御自分にあると、「是は私に踏切があつたから負であります。」と御主張になる。審判官や行司が少しでも不公平な裁判をすると、非常に御嫌ひになる。仲間の者が、「其の方が都合がよいではありませんか。」などと申すと、「そんな不正直な事はいけない。」と仰せになる。御判斷に決して私心を挾まれない。それであるから、歴史上の事柄を御批判

なさる時など、實に理路井然、公明正大で、よく大局から斷案を下し給ふ。實に陛下の御心はさながら少しの曇もない明鏡であらせられます。それゆゑ陛下の御心鏡の前に立つては、正邪善惡の姿がはつきりとあらはれて、隱すことが出來ないのであります。

陛下は非常に御仁心が深い。どちらかと申せば御口數の少い方で、御世辭などは仰せられないが、誠に思ひやり深くあらせられます。從つて御幼少の時分から、普通の子供に有りがちな、友達をおいぢめになるとか、意地惡い事を遊ばすといふやうなことは決してありませんでした。そして友達に對しても、御側の者に對しても、好き嫌ひといふことが全くなく、一視同仁で、公平に御愛しになります。侍從や侍從武官などに對しても、新舊の區別なしに優しく御接しになるさうです。而も舊い人をいつまでも御忘れにならずに、元の侍女や御學友などが御伺ひ申すと、大變に御喜になりますし、時々の御召もあります。私どもにも無論其の通りで、御誕辰其の他の御祝には屹度御召があり、御機嫌伺に出れば御喜になつて、特別に拜謁を許され、御暇の時は何時までも御引止めになつて御話下されるのであります。

先年御外遊の時には、私は、ロンドンやパリーで御迎へ申上げましたが、屢御召を蒙つて御陪食を賜はり、內外諸名士の前でも先生々々と仰せられるので、覺えず身の光榮に感泣

した次第であります。これは實に教育者の天職に對する無上の光榮でありませう。人心がだん〳〵荒んで師恩を忘れるどころか、全く念頭に無いやうな青年學生の多い今日、陛下の御態度は實に貴い御模範ではありますまいか。陛下の御盛德を稱へ奉ると、まだ澤山にありますが、要するに陛下は御天性實に間然する所の無い立派な御方で、まことに神々しい御性質を御生れながらにしてもつていらつしやると申し奉るほかはありません。（教育研究）

二　十二德（昭憲皇太后御歌）

昭憲皇太后
明治天皇の皇后
藤原美子
大正三年崩御

節制　自分の身をつゝしんで

花の春もみぢの秋のさかづきも
ほど〳〵にこそくまゝほしけれ。

清潔

しろたへの衣のちりは拂へども、
うきは心のくもりなりけり。

勤勞

みがかずば玉の光はいでざらむ、
人の心もかくこそあるらし。

沈默

過ぎたるは及ばざりけり、かりそめの
言葉もあだにちらさゞらなむ。

確志

人ごころかゝらましかば、白玉の
またまは火にもやかれざりけり。

誠實

とりぐにつくる
かざしの花もあれど、
匂ふこゝろの
うるはしきかな。

昭憲皇太后

溫和

みだるべきをりをばおきて花櫻
まづゐむほどをならひてしがな。

謙遜

高山のかげをうつしてゆく水の
ひくにつくを心ともがな。

順序

おくふかき道もきはめむ、ものごとの
本末をだにたがへざりせば。

節儉

吳竹のほどよきふしをたがへずば、
末葉の露もみだれざらまし。

寧靜

いかさまに身は碎くとも、むらぎもの心の枕詞

縁語

心はゆたにあるべかりけり。

公義

國民をすくはむ道も近きより

おし及ぼさむ、遠きさかひに。

右十二首弗蘭克林の十二德をよませたまへる。（昭憲皇太后御集）

弗蘭克林 フランクリン Benjamin Franklin (1706—1790) アメリカの政治家學者

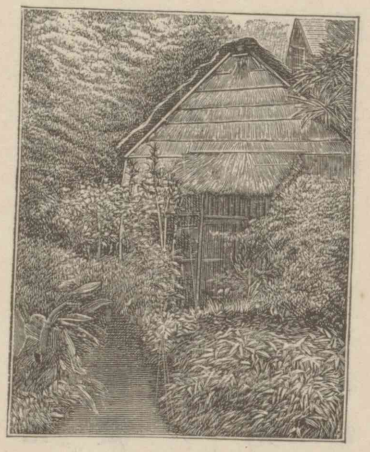
三　この春

北原白秋

こゝに移り住んでから、これほどに、私は、しみ〴〵としたし、かもまた明るい、春らしい春に出逢つたことはない。たゞわづかに五六日しか他行しなかつたのに、歸つて見る

北原白秋 名は隆吉 詩人 こゝ、神奈川縣足柄下郡小田原町

と、小田原の町はもう櫻の眞盛りになつてゐた。ことにお濠端の並木などは、あの大地震に崩れつくした石垣の上から、殆ど倒れたまゝで、咲き亂れてゐた。ある枝などは、青濁りの水にその尖端がとゞいたなりで、既に薄紅に匂ひこぼれてゐた。あるものはまた舊城の枯松や霜燒けした鉾杉などと横倒しに喰ひちがつたまゝで、而もおそろしく咲きしらんでゐた。



木兎の家

それよりも、この天神山を登つて、いよ〴〵私は春の闌けたのに驚かされた。傳肇寺といふ名ばかりのこのバラック

大地震 大正十二年九月一日の關東大地震

お濠端 小田原御用邸のまはりもとの小田原城

天神山 小田原驛の近くにある小山

Barrack バラック

アネモネ Anemone 西洋草花の名

の寺の墓地前の櫻も、遲咲きの八重ながら、もうとくに盛りになつて、井戸のそばのくづれた竹垣の上には、紅・紫の蘇枋の花が咲出し、うちの木兎の家とのさかひには、また造花のやうな眞紅な緋桃の花が光りかゞやいて、下垣の青い蕗の葉までも、かへつて色濃く引きたゝせてゐた。

わたくしは家のはひり口の二本の棕櫚の根方に、紅い一輪のアネモネの花をも見つけた。

而も、それよりもつとわたくしの目を驚かしたのは、家のまはりの孟宗林の楚々たる姿の薄黄であつた、いや、その下萌えの深い緑であつた、雨に濡れた白いなづなの花のむらがりであつた。

ムーンフラワー Moonflower 西洋草花の名

コスモス Cosmos 西洋草花の名

いや、まだ驚いたのは、吾が子の顔であつた、姿であつた。急に目立つてさかしく、大きく見られたことであつた。

庭の花壇にはいろ〳〵の草の芽生えがひわれて來た。金蓮花・羯鼓藪・向日葵・雛芥子・ムーンフラワー、蒔けるだけ蒔いた野菜の二葉、それからひとり生えのコスモスや葉雞頭などは、もう足の踏場さへもないほど生えつめてゐる。

窓の下の山吹にも、ちら〳〵と枝の深い方で黄色く綻びる花が見えだした。南天の實もいよ〳〵紅く混つて見えだした。

つい前の、隣の小藪には、實に新鮮な蒲公英が數かぎりなく、朝ごとに咲いては、また寺の子たちに摘まれて了つた。

この裏の別莊の丘にのぼると、そこらはもうつくしんぼの季節が過ぎて、代りに一面の杉菜が露を綴り、虎杖（いたどり）のやはらかな嫩芽、幼い御形・蓬、見るもの踏むものごとに、わたくしは更にみづ〳〵しく親しい隣の春を樂しまずには居られなかつた。

つい二三日前の夜には、ころ〳〵と蛙の遠音もきこえたやうであつた。わたくしたちは鍬をとつて、あちらこちらの孟宗の根を掘返しては、まだほの黄色い幼い筍を探しまはつた。

出入りの魚屋が、今朝むつの卵を持つて來た。私たちは、それを煮、とりたての鰺の刺身をつくらせては、新筍の五目飯（バラズシ）に滿腹した。

かうしてまた、「赤い鳥」の兒童の詩の選をしたり、じやがたら漬をたべたり、ヂヤスターゼを嚙んだりしてゐるのである。

さうして今夜もまた徹夜で勉強だぞと懸命である。

（季節の窓）

赤い鳥　少年雜誌の名
ヂヤスターゼ　Diastase　澱粉醱酵素　消化藥

土岐善麿　號は哀果　歌人　東京朝日新聞記者

四　九官鳥と鶯

土岐善麿

この鶯は、ある朝ひよつくり窓から書齋へ飛び込んで來たのだ。わけもなく捕へられたので、そのまゝ有合せの小さい籠に飼ふことにした。もとより藪鶯で、ろくな鳴聲ではなかつたが、それでも「ほうほけきやう」と鳴くことは知つて

ゐた。水をやつたり餌をやつたりしてゐるうちに、すつかり馴れて、朝の寐覺などに夢現ともなく床の上で聞いてゐるのが樂みになつた。

茶の間の方には前から九官鳥が一羽飼つてあつた。「お早う」などはよく言へるやうになつてゐたが、この鶯がやゝ離れた書齋の方で「ほうほけきやう」と鳴くやうになつてから、じつと聞耳を立てゝゐた九官鳥は、いつのまにか、鶯が「ほう……」と鳴きはじめると、すぐそのあとを承けて「ほけきやう」と物眞似のいたづらをするやうになつた。「ほう……」と息をふくめてから、さて「ほけきよう」と朗かに歌はうとしてゐる鶯にとつて、このどこからともなく聞えるお先走りの自分の歌聲は、山深く反つてくる木魂とは違つたもので、不思議な、薄氣味の惡いものだつた。

「ほけきやう」を續けるのを止めて、最初の「ほう……」といふのを少し長く延して、あとの不思議な歌聲を待つてゐると「ほけきやう」と鏡の反射のやうに聞えてくる。鶯は、この怪しい不氣味さに堪へられなくなつて、遂に「ほけきやう」といふ歌聲を自分の唇から出すことを憚るやうになつた。

九官鳥

「ほけきやう」と續けるのを初めのうちはおもしろくも思つ

てゐたが、相手が歌はなくなつたので、自分も興がなくなつて「ほけきやう」と鳴かなくなつたのだが、その間にほんたうの鶯の方はまた、自分の歌聲も忘れた氣持になつて、たゞ「ほう……」といふだけで止めてしまふ習性がついてしまつた。「ほう……」と鳴くだけで「ほけきやう」のない歌聲は、藪鶯にしても餘りに不器用だが、その後口笛で教へこまうとしてもなほ不思議がつて、どうしても相變らず「ほう……」といふだけしか鳴かない。

これはN君の家でのことなのだ。この間遊びに行くと、その書齋に鳥籠があつた。そして小さい鶯が、首をかしげて「ほう……」と鳴いて、そのまゝ默つてしまふのを不審に思つ

て聞いたところが、こんな話をしてくれたのである。

一體、九官鳥の本來の鳴聲はなんといふのだらうか、鶯ならどんな藪鶯でも「ほうほけきやう」と大抵は鳴くのだが、九官鳥は人間の話聲などの眞似を巧にするけれども、眞似はいかにうまくても、本來の鳴聲にはなり得ない。「お早う」と呼びかけても人間にならないと同樣に「ほう……」のあとを承けて「ほけきやう」と鳴いても、やはり鶯にはならないのだ。

「ほう……」と鳴いただけで、あとを眞似られたために「ほけきやう」を忘れてしまつた鶯も、ふがひないと言へばふがひないやうなものゝ、それでも鶯であることは動かし難い事實だ。「ほう……」といふ最初の歌聲まで、九官鳥は眞似ること

があるかも知れない。　またその「ほう……」といふのまで、この鶯は言はなくなつて、默々としてたゞ籠のうちにあたりを見廻すやうになつてしまふかも知れない。

「どちらの生活が幸福なのですかね」。

「お伽噺みたやうな問答ですね」。

わたしはN君とこんなことをいつて、新しく運ばれた紅茶をのんだ。（春歸る）

村山もと子
村山醫學士の妻
歌人

五　師の君に

師の君
佐々木信綱

いまだ春寒き此の頃師の君御はじめ、御障もおはしまさずや。其の後はつい〳〵家の事にとりまぎれ、心の外の御無音申し上げ候ひしこと誠に申譯もなく、また先日は詠草御直し給はりありがたく、仰せいたゞきし歌も延引致し、何卒御ゆるし給はりたく願ひ上げ候。

村山もと子

此の地
相模國浦賀町

都も程なく花さきそむる頃と、そゞろゆかしう思ひやられ候。　此の地は櫻はあまり見えず、只宅の東の窓の下に大きなる八重櫻の一本あるを樂みに致し居り候。近き山には蕨・ぜんまいなど出で候よし、子等は道草などをつみにまゐり候。

品川
東京市の南に接せる町

さいつ頃始めて汐干狩にまゐり候ひしに、品川わたりとは事かはりて磯に石多く、その上を傳ひ行くは、なかなかむつかしき事に候。　三人ほどにて、やう〳〵牡蠣

心の花　佐々木信綱主宰の歌の雜誌

少々と、淺蜊の小さきもの十ばかりを採り申し候。廣き海邊に男一人も見えず、只女のみ熊手の如きものにて、石より牡蠣とり居り候。慣れぬ目には何事も物珍しう候へども、夕暮など、都の空のみながめられ、御懷かしう存じ上げ居り候。

「心の花」手に取り候折々何より樂しき時にて、遙けき境にあることをも打忘れ、親しく御教いたゞく心地致され候。

なほ申し上げたき事ども數々候ひしが、年とり候うてはなか〳〵浮び出でず、また〳〵聞え上ぐべく申し殘し候。

田山花袋　名は錄彌　小說家

金剛山　河內國南河內郡にある山　千早城址がある

末ながら、何卒々々御奧樣によろしく御傳への程願ひ上げ候。かしこ。（現代名家書簡集）

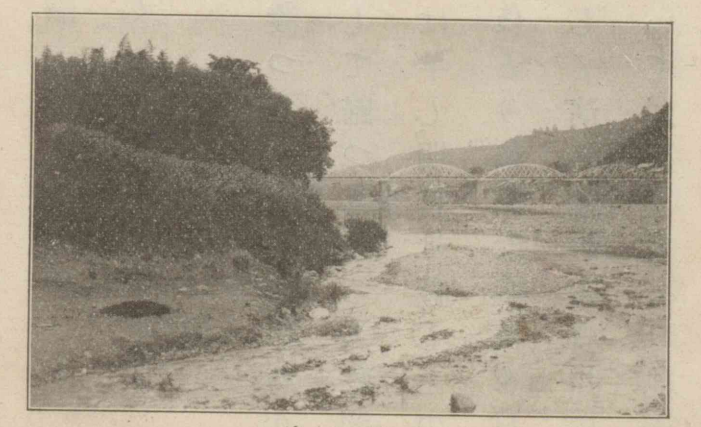
六　吉野

田山花袋

金剛山を越えて、吉野の六田（むた）の渡を渡つたのは、午後四時少し過ぎた頃であつたか、途中、花を挿して歸つて來る人に聞いて見ると、花は今日が眞盛で、昨日は早し、明日は遲しとの事であつた。漸く六田の柳の渡のほとりに來た頃は、夕日がもう彼方の山の凹處に沈まうとして、淸い速い吉野川の流は、閃々と美しい紋を川の面に畫いて居た。自分は、船が前岸に着くと、そのまゝ急いで飛下りて、一直線にそのなつ

かしい吉野山へと志した。

街のはづれに一つの黑い門があつて、此處から奥の院まで六十町餘と書いた札が立つてゐるが、それをくぐると、もう山で、櫻の花が段々と路の兩側に見え出して來る。入口は盛が過ぎて、花びらの枝に殘つて居るのもきはめて少いが、次第に登れば登るほど、花は多く盛になつて、四邊の眺望の美しさは、殆ど言葉にも筆にも盡すことが出來ない程である。右手には、越えて來



六田の渡

護良親王　後醍醐天皇の皇子

大塔宮

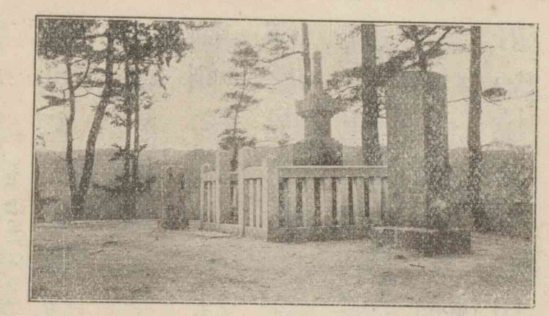
千早　金剛山に築いた楠正成の城

赤坂　河内國南河内郡赤坂村に築いた楠正成の城

た金剛山が、偉丈夫の端坐してゐるやうに聳えてゐて、それを仰ぐと、護良親王が十津川から此の地に入つて、千早・赤坂と共に三足鼎立の勢を作られた事などがすぐ胸を衝いて浮んで來る。

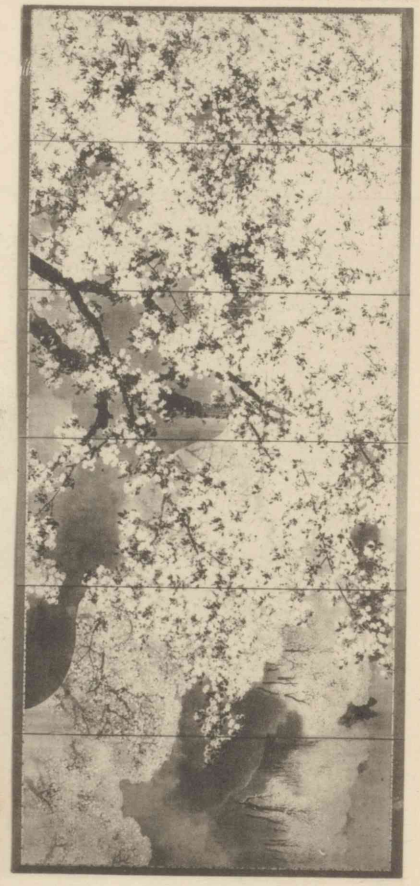
兩側の花はいよ〳〵美しい。自分は往く〳〵右と左の大澤を見下しながら、夕日の華かな光のぱつと谷間々々の櫻花の上に匂ひ渡るのを見て、獨りつく〴〵と、この山の景のいかに懷古の情を起すに適して居つたかを思つた。花も好い、境も好い、山も面白い。けれども吉野朝の遺跡が無かつたら、決してこれ程の感興を起すことは出來なかつたように。

村上彦四郎義光の墓の前にひざまづいた時は、自分は何とも知れぬ悠久な感にうたれて、暫しは其處を立去る事が出來なかつた。義光は身を以てこの吉野の落口を安全に守りまゐらせたのであるが、もし後年に至るまで、この忠勇無二の義光が生きて居たならば、親王は決して鎌倉の土窟にはかない最期を遂げさせ給ふやうな事はなく、或は吉野朝の衰へたのを恢復することが出來たかも知れない。つたないのは吉野朝の運命である。

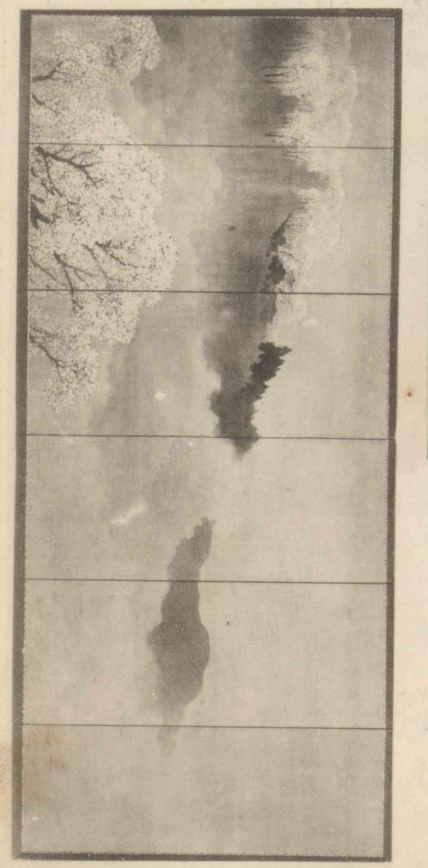


村上義光の墓

この時、自分の立つて居る傍で、一群の醉客が鄙しい歌を歌



（筆文芳池菊）

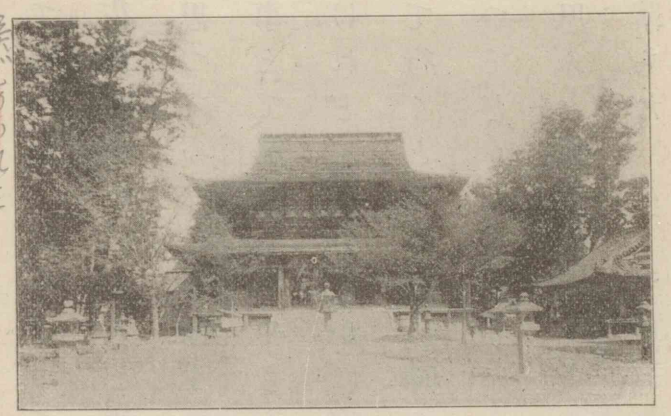


野吉ゐふ雨小

ひながら、遠慮もなしに、自分の肩を掠めるやうにして過ぎて行つた。　自分はすでにこの山に登つた時から、心もない花見客のわい〳〵と酒に醉つて歩くさまを、非常に不快に思つてゐたが、今は丁度自分が無限の感慨に打たれてゐる事とて、罵倒してやらうかと思ふ程癪に障つた。

けれども、花の穏かに咲匂つてゐる間を、一歩二歩とたどつて行くと、その癪に障つた念は、一種深い〳〵悲哀の情に變つて、どうにもかうにもたまらないやうな心地になつたと思ふと、涙がはら〳〵と落ちた。　そして草莽の孤臣といふ感が、胸も狹しと溢れて來て、自分ももし其の時代に生れたならば、たとひ雑兵とな

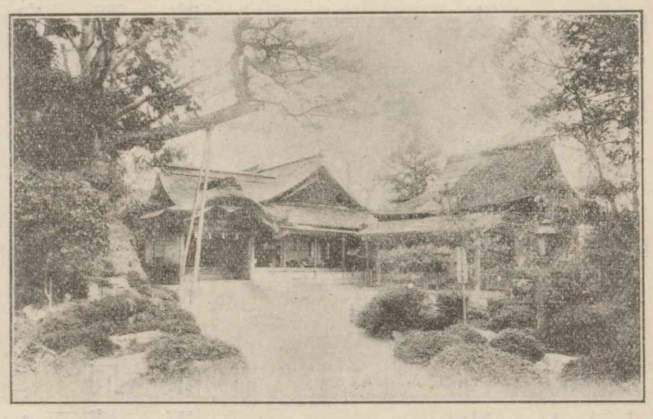
つても、この勤王の志を致したであらうにと思つた。



吉野藏王堂

そこから吉野の山奥までは五十町、自分はこの間をどんな感慨とどんな涙とを以て行過ぎたであらうか。護良親王の奮戰された藏王權現堂の、高く櫻花の上に聳えて居るのを仰いでは、どんなに激しい懷古の情に打たれたであらうか。吉水院の行在所のあとを尋ねてはどんなに深い暗涙に咽んだであらうか。

こゝで、この花の中で、後醍醐天皇は劍を按じておかくれ遊ばしたのである。こゝで楠正行は歌を扉の上に殘して、決死敵軍に向つたのである。こゝで吉野朝五十年の帝業は建てられて、正義といふ精神は赫々として光を日月と爭つたのである。そして六百年前の夢のあとは、今もなほ美しい滿山の花影の中に微かに匂ふばかりに殘つてゐるではないか。



吉水神社

これほど美しい詩があらうかと、自分は幾度も思つた。自分はかういふ風にこの吉野朝の遺跡を處々に見て、一層深くこれに對する同情の念を增したが、翌日吉野山を下る時には、幾度となく振返つて、殆ど別れ難い思がした。

（花袋紀行）

高濱虛子
名は清
俳人
小說家

七　朝の庭

高濱虛子

萩の若葉の心の處に油蟲が付いて居る。又其に蟻が群がつて居る。よく見ると油蟲は時々痙攣を發したやうに動いて居る。蟻は其の上を無造作に這つて居る。是は結局どちらの勝に歸するのであらう。萩は一體己れをどうする積りだと言つたやうに、痒さうに首筋をもたげてじつとしてゐる。

其の萩の下に蟻が塔を作りつゝある。昨日の雨が大地をぼこ〳〵柔かくして居る。其の土を山のやうに積み上げて居る。幾匹とも數知れぬ蟻が其の山の上を右往左往にさまよつて居る。五六匹の蟻は、頭を突き合して何か談合してゐる樣子であつたが、慌しく連立つて巢の中に這入る。又連立つて巢の中から出て來る。

何處やらに蠅の唸る聲が聞える。

庭の芝生に菌が生えて居る。毎年今頃になると、此の菌が生える。白い小さい菌で、一緒に十ばかりもかたまつて生

えて居る。又芝生には小さい草花が生えて居る。其は斯うやつて芝生にしやがんで居ると、始めて目に入るやうな小さい花である。小さい莖の尖に白い小さい萼が咲いて居る。小さいと言へば芝の尖に一つ〳〵宿つて居る露は馬鹿に小さい。裳や下駄を濡すのは此の露である。それよりも愈小さいのは、菌の傘の端に宿つて居る露である。傘の端がぎざ〳〵になつてゐる其の一つ〳〵の尖にある露である。

白い蝶が三匹もつれて、松の樹の向ふに飛んでゐる。

睡蓮の萼が少し締りを緩めて居る。

一番電車。作者の家は神奈川縣鎌倉町電車は鎌倉藤澤間を通ふ

雨氣がすぐ近くの山の上に迫つて居る。隣の庭の松の樹をも露が包んで居る。

芝生に樣々の蟲がゐるのに氣が附く。その中に小さいばつたが居る。是は赤ん坊のばつたであらう。私の下駄の影を恐れて逃げまどふ。他に芝にしがみついて居る一匹の蠅が目にとまる。是は今やつと生れ出た儘であらう。羽が極めて綺麗で、全體が薄紫色をして居る。其に二つの黑い眼が馬鹿に大きい。

蝶が殖えた。七八匹も松の樹の間を飛んで居る。一匹は私の背中のあたりを飛ぶ。

睡蓮の萼を覗き込む。芭蕉の雫が襟元に落ちる。熱帶の

病を此の雫が持つて來たやうな心持がして、ぞつとする。睡蓮の莟は少し口を開けかけて居る。其の中に黄色い蕋がほのめいて見える。青梅が三つ圓くなつてゐるのが目立つ。其の他にもなつてゐるのであらうが、青葉がくれに見えぬ。

二番電車が通る。（朝の庭）

室鳩巣
名は直清
漢學者
德川幕府の儒官
享保十九年（一三九四）歿す
谷中
東京上野公園の西北
もと多く寺院に給せられた地

八　老僧の接木

室　鳩　巣

谷中の里に、何がしの院といふ眞言寺あり。我、幼かりし時その住僧を知りて、屢〻寺に行きて、木の實拾ひなどして遊びしが、住僧傍の人に向ひて、前住のことを語りしを聞きしこ

將軍家
德川家光

とあり。寛永の頃とかや將軍家谷中あたり御鷹狩の節、御徒歩にて、此處彼處御過ぎがてに御覽ましくけるが、この寺へも、圖らず立寄られしに、折節、その時の住僧はや八旬に及びて、庭に出でて自ら接木して居けるが、御伴の人々は後れて、御側には二人三人扈從せるのみなりしを、さる貴き御方とは思ひもよらねば、そのまゝ背き居たりしを、「坊主何事するぞ。」と仰せられしかば、老僧心に怪しと思ひて、いとはしたなく、「接木するよ。」と御答申しゝかば、御笑ありて、「老僧が年にて、今接木したりとも、その樹の大きくなるまでの命も知り難し。それに左樣に心を盡すこと不用なるぞ。」と上意ありしかば、老僧「御身は誰人なれば、かく心なき事をいひ給ふ

ぞ。よく思ひて見たまへ。今この樹どもつぎておきなば、後住の代に至りて、いづれも大きく生ひ立つべし。然らば林も茂り寺も幽ならんと、我は寺の爲を思ひてすることなり。あながちに人一代に限るべきことかは。」といひしを聞かれて、「老僧が申すこそ、實にも理なれ。」と感ぜられけり。その程に、御供の人々おひ〳〵來りつゝ、御紋の物ども多くつどひしかば、老僧それに心得て、大いに恐れて奥へ遁げ入りしを、召出されて物など賜ひきとぞ。（駿臺雜話）

吉江孤雁
名は喬松
文學者
早稲田大學教授

上海
支那揚子江の河口
東洋第一の貿易港

九　波に咲く花

吉江孤雁

上海を出て、臺灣海峽を通つて三日間ばかり行くと、香港といふ英國領の島に着きます。こゝは全くのヨーロッパ風で、市街が、小さなそして高い山を中央にして、島を取卷いて建つてゐます。美しい立派な廣い路が島の周圍を繞り、次第に山の中腹まで繞り繞つて登つて行きますが、山の頂までは、外國人は何人でも登ることは許されません。なぜならば、この島はイギリスの東洋での大切な商業の港であると同時に、大切な要塞・砲臺のある處で、その要塞の設備を外國人が見てはならないからです。この島にも、日本人はなか〳〵澤山商業をやつてゐます。會社の代理店などは幾つもあります。

香港
支那廣東河口にある一小島

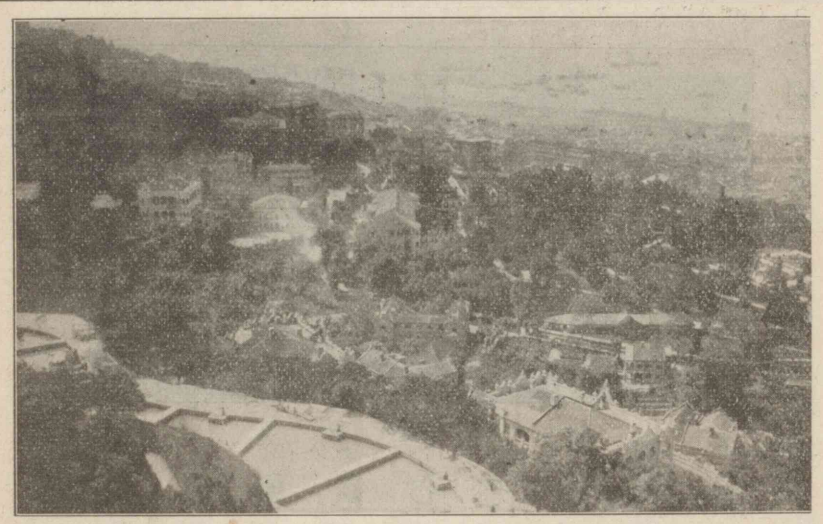
香港の市街の美しさは夜です。そして、それは港に碇泊し

香港

てゐる船から眺めた景色です。海岸より山の中腹までだんだん高くなつてゐる家屋のあらゆる窓から電燈が輝いて、ちやうど大きな蜂の巣の一つ〳〵の孔に燈火をつけたやうです。そして港の中を通ふ小蒸氣は花電車のやうに美しく飾つて、あちこち走り廻つてゐます。香港まで來ると、いかにも洋行したやうな氣になります。

シンガポール
新嘉坡
亞細亞の東南部海峽植民地の港市
Singapore
英領

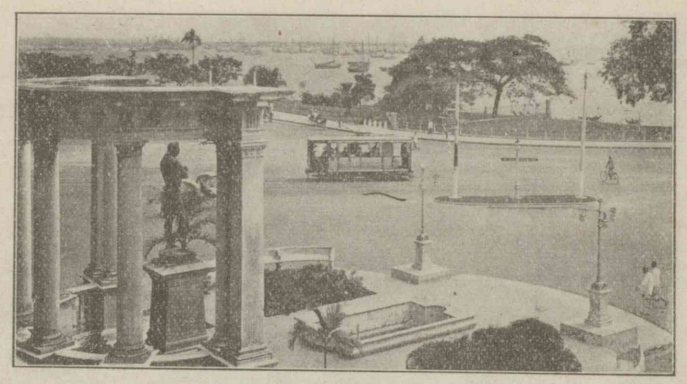
棕櫚の花咲く
椰子の實みのる
共に池邊義象の「世界一周唱歌」の中の句



港

香港から先はシンガポールといふ港です。「棕櫚の花咲くシンガポール」と皆さんが歌ふその港です。こゝはもう熱帶で、地面から、空中から、暑さがどつと人の身體を包みます。船からおりて市街を通ると、強い花の香やら、水菓子屋の前で嗅ぐやうな果實の香氣やらが鼻をうちます。こゝの公園へ行くと、眞紅な幹をした檳榔樹が眞

青な葉をして立つてゐます。又六七寸もある金色や青色のとかげが草の上に眠つてゐます。そして木の枝には栗鼠がかさ〳〵と木の葉を動かして飛んでゐます。そして水の面には紫色の睡蓮がぽつぽつ咲いて、夢でも見てゐるやうです。眞晝頃になると、しんとして物音一つも聞えません、たゞむせかへるやうな強い光の香が空中に漂つてゐるばかりです。全く異なつた國へ來たといふ心持がします。



ルーポガンシ

セーロン Ceylo：錫蘭 印度洋中の一大島 英領

ナイフ Knife

それから先の港は「椰子の實みのるセーロン島」です。皆さんは椰子の實といふものが樹になつてゐるのを見たことがおありですか。大きな猿の頭のやうな形をしたのが、幾つも幾つも、高い樹の上になつて、いかにも重さうに見えます。その外皮をむいて、また眞中から二つに割つて、中の眞白な實をナイフでそいで、生で食べたり、煮て食べたりします。生栗を食べるやうな味のするものです。

船の上から見ると、この邊の海岸はちやうど日本海岸が松の林で覆はれてゐるやうに、どこまでも椰子の木で覆はれてゐるのです。そして船が港に着くと、どこからともなく、眞黑の子供が小船に乘つたり泳いだりして、その船の周圍

に集つて來ます。ちやうど眞黑の大きな魚の群のやうです。これが何かわい〳〵言ひながら、水を潛つたり、浮き上つたりして船のあたりを騷ぎまはります。これは乘客から錢を貰ひに來たのです。そして銀貨を投げてやると、すばやく小船の中から飛込んで、銀貨の水中に沈んで行くよりも早くその下へ廻つて、巧に受け止めるのです。その巧なこと、どんなに遠くへ投げても、また船の眞下へ投げても、一つとして受け損ずるやうなことはありません。水中でも、水の表面でも、自由自在に飛びまはり泳ぎまはるに驚かされます。

セーロン島を出た船は、普通ならば印度洋を横切つて、紅海

地中海
歐羅巴と亞弗利加との間にある海

喜望峰
亞弗利加洲の南端に近い岬
Cape of Good Hope

を通つて、地中海へ出るのですが、私の乘つた船は、戰爭最中で地中海が危險だといふので、印度洋を南へ〳〵と下つて、赤道を越えて、アフリカの南の端の喜望峰といふ處へ向つたのです。

地圖を披いて御覽なさい。セーロン島から喜望峰までは隨分長い間です。船はちやうど十七八晝夜、山も陸地も見えぬ水の上、いくら四方を眺めても何一つ見えぬ大洋の上を走つて行つたのです。

ところが、船が赤道を越える前後に、無風帶といつて、年中風の少しもない處があるのです。我々の地球の表面の眞中を帶のやうに取卷いてゐる一帶がそれです。そこは鏡の

面のやうに平かで、どつちを見ても小波一つ起りません。たゞ船脚に碎ける波が、深い眠から覺めて驚くやうに、少しばかり騷ぐだけです。眞靑な水、目が眩むやうな日の出、一片の雲もない大空、まんまるく四方を取圍んだ地平線。我我の船は今やこれらの眞中にゐるのです。そしてその船から立上る煙は眞直に立つて、少しも亂れません。太陽は帆柱の眞上から光を放ち、ちやうど鏡張の室の中へでも身を入れてゐるやうに四方に照り渡つて、實にさわやかな氣持です。

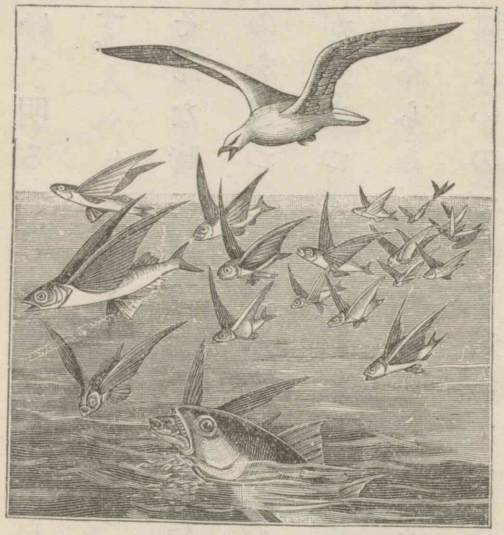
けれど、廣い〳〵大洋の眞只中に生きて動いてゐるものとては何もありません、又何の音も聞えません、たゞ我々の船

スクリュー Screw 螺旋式推進機 暗車

ばかりです、我々の船のスクリューが立てる音ばかりです。かやうに靜かな眠の國を一日か二日か航行して御覽なさい。明るいけれど、何とも言はれない寂しさのあるものです。

そんな時に、波の上を不意に掠めて飛んで行くものがあるのを思つて御覽なさい。何でせう。銀色をした小さな魚が列をつくつて、縱に横に波の上を舞つて行くのです。小鳥ぐらゐの大きさに見えますが、實際はそれより大きいに違ないのです。飛魚です。今まで油のやうに淀んでゐた眠の海、死の海の中へ不意に大きな船がはひつて來て、不思議な姿をして波を切つて行くので、びつくりして、俄かに波

の中から飛立つたのでせう。一列になつて十も二十も飛んで行くのがあるかと思ふと、横に並んで競爭するかのやうに、後から〳〵と飛出すのもあります。その銀色にきらきらと光るさまは實に一大壯觀で、目もくるめかんばかりです。



これが波に咲く花です。そして、これこそは此の無風帶に於けるたゞ一つの波の戯です。たゞ一つの生きたものの姿です。

船がこの無風帶を出拔けると、波がそろ〳〵高くなつて來ます。今まで滑るやうにしてゐた大きな船體が搖れはじめます。波の大きな頭が遠くから眞靑になつて起つて來ると、いつの間にかその波頭は船の底へ潛り入つて、船を持上げます。船は思はず前後によろめき、船底のスクリューはさも苦しげに音を立てゝ忙しく回轉します。けれどこれぐらゐはまだ何でもないことです。船が次第々々に日を重ねてアフリカの岸近く寄つて行きますと、潮の流が急になり、船の動搖が一層烈しくなつて來ます。さうすると、ど・こから出て來たのか知れないが、眞白な大きな信天翁（あほうどり）といふ海鳥が、船の上を、また船の周圍を包んで飛びまはりま

す。（趣味の紀行文）

三木露風
名は操
羅風とも號した
詩人

一〇　紅椿

三木露風

山越えて來たふるさとの
家の籬にたゞ一つ
紅い椿が咲いてゐる。

あゝ紅椿、紅椿、
ありし昔をそのまゝに
夢ともならで咲く花よ。

昨日吹いた西風は
遠い響となつて消え、
けふ麗かな海の町。

あゝ西風のやんだやう
我が悲みも過ぎ去つて
ひとりしみ〴〵海を見る。

ふるさとの、ふるさとの
家の籬の紅椿
その葉を越して

海を見る。（青き樹かけ）

一一　樂園

中村吉藏
かつて春雨と號した
小説家
戯曲作者

今人間の住んでゐる此の地球は、餘程古い年數を經たもので、誰も、何時頃造られたか知る事が出來ない程である。しかし、此の地球も日も月も星も何もない時には、唯始なく終なく、永劫の昔から永劫の未來まで在さぬことのない神が在るだけであつた。ずつと大昔に、混沌として空虛の中から天地が此の神の聲の下に出來た。しかし、今の樣に美しい山も川も海も谷もなく、樹木も育たぬ、花も咲かぬ、唯土や水が一つになつて、ふす〳〵と煙の立つ大きな塊であつた。

そして大地は、その上に照る光が無いから夜中の闇より尙暗く、人も住まず、獸もゐず、眞黑な水には浮ぶ魚さへない、生物とてはすこしもなかつた。唯神の靈だけが此の上にある。

「光あれ」と暗い闇の中から神の聲がして、始めて此の世に光が出た。闇は逃げて一所に集つた。その暗い間を夜と名づけ、光のある間を晝といつた。是が抑最初の第一日である。

神の聲につれて、地の周圍の暗い雲が破れ、水が二つに分れて一つは昇つて靑空となり、他は地に留つた。此の靑空を天と呼んで第二の一日は去つた。

神は「地の上なる水は一所に集りて乾きたる土出でよ。」と言ふと、其の通りになつた。集つた水を海と呼び、乾いた土を陸と名づけた。更に又「陸には草木生ひ出で、花咲き、果實れよ。」と言ふがまゝに、草木は綠に萌え、花は美しく咲き出で、果實が豐かに實つた。これが第三日目である。

次には晝夜をわかち、月日を定める標に、晝には太陽、夜には月と星とを天に輝き出さしめた。これが第四日目である。

次の第五日目には「海には游ぐ物、陸には飛ぶ物、生命あるもの數多成れよ。」と神の聲に應じて、海には大小の魚、陸には天地の間に飛翔る鳥が出來た。更に「陸の上に這ひ歩く生物出でよ。」とて、大きな獸、小さな獸を作り「汝ら殖え繁りて榮えよ。」と祝うた。

地球は稍〻美しく整うて來た。綠の野邊に花咲く樹陰、鳥は樂しげに囀り、さま〴〵の獸は森の木の間に戯れてゐるが、まだ此の美しい天地に一つ物足りない氣がするので、神は「他の生物とは異つて、我に似た俤の人を作らう、人を海の魚、空の鳥、地に住むありとあらゆる生物の主としよう。」と言つて、地の土を取り上げ、神の姿に似させて人の形を作り、生命の息を吹込んだ。茲に最初の人は生れ出で、地の上に立つた。

神は此の人間に「殖え繁つて榮え行けよ。見よ萬物は汝の物だ。穀物・果實は皆汝の糧に與へる。生命ある物をも汝

Eden エデン　Adam アダム

の意のまゝに治めて行け」と祝福の語を授け、さてこれを創世の業の最後の華と六日目を終つて、七日目を安息の日として「後世までも安息日として瀆す勿れ」と掟を定められた。」

今は此の地球は美しく整うて來た。神は最初の人間に、土から出たといふ意味でアダムと名づけ、美しい園を作つて其の住家とした。エデンの園といつて、花は見るに美しく果は食ふに甘い木を擇んで植ゑた。園の中央には生命の木、善惡の分別の木といふがある。地を潤す爲にピソン・ギホン・ヒデケル・ユフラテの四つの川が一つの源から四方へ流れ出る。園の廣さは幾方里あるとも知れぬほど、其の園守にアダムを置いて、中の果實や草木は思ふがまゝに摘み

Eve イヴ

取らせ、それで生命を繫いで行く事にさせた。かくて神が作つた生物を皆其の園の中に連れて來て、一々アダムに其の名をつけさせた。かくてエデンの園は樂しく快い住所となつて、草木は繁り鳥獸は遊ぶ。アダムは家も小舍も身を隱す衣も要らぬ、凡てが清く美しく潔いのである。

アダムは此の美しい園に唯一人で住んでゐたが、神は「人間は唯一人でゐるのは宜しくない、共にゐて相助ける者を作らう」とアダムを眠らせて、アダムの肋（あばら）の骨を取つて一人の女を作り、名をイヴと呼んで、アダムの妻とした。妻は夫の骨の骨、肉の肉、同身一體のものである。アダムもイヴも、神の俤に似て美しい心を有ち、互に睦まじく、神を父と愛して

まのあたりに語を交した。二人は悲みも苦みも恐れも覺えぬ。唯神に愛せられて神の命令に從ふばかり、かくて長く長く此の樂園に、罪に汚れぬ生涯を送るべきであつた。

アダムとイヴ（ラファエル筆）

茲に一つの誡言（いましめ）があつた。「園にある木の實は汝の取るに任せるが、唯中央に生ひ茂つた木の實には手も觸れるな。食へばたちどころに死ぬぞ。」といふのである。

アダムもイヴに向ひ常に此の誡言を心に留めよと言つてゐた。

然るに此の園の中に、姿も心も拗けた惡い蛇がゐる。此の蛇がイヴに向ひ「神が此の園に實つた果實の中で、食べるなと禁じたものがあるか。」ときいた。イヴは「園の中の果實は心のまゝに取つてもよいが、唯中央にある木の實だけは、食べると必ず死ぬと誡められた。」と答へると、蛇は「いや〳〵決して死ぬ事はない、彼の果實を食べると、おまへたちが神よりももつと賢く、善惡の分別がもつと明かになるのを知つて、神はかく誡めたのだ。」とさゝやいた。

イヴはかうさゝやかれて、さてその樹を見、果實を見ると、さも甘さうに色づいてゐる。ほんとに賢くなれるものならば、神の誡言を背いてまでも食べて見たい氣がして、たうと

う果實をもぎ取つて自分で食ひ、今一つはアダムに與へた。アダムもそれを食べた。

二人は神の誡言に從はなかつたのを悪い事と思つたので、今までになく、神に顔を合せるのを恐れ出した。そして深く木の間に隠れて神の眼を避けようとした。併し、神が「アダム何處に居るか」と呼ぶので「主よ、私は主の聲を聞いてゐますが、裸體だから、怖れて隠れてゐます」と答へると、神は「誰が汝に裸體だと知らせたか、さては汝は手にも觸れるなと命じて置いた禁制の果實を食べたな」と聞くので、アダムは「共に住めと私に下さいました此の女が、果實を私にくれたので食ひました」と白狀した。神はイヴに「汝は何故かゝる

事をしたか」といふと、イヴは「蛇が私に勸めたので食ひました」と答へた。

神は蛇に「汝はアダム・イヴを悪事に導いたから、今後は他の生物の如く歩むことはならぬ。長へに腹這ひ、塵と土とを餌とせよ。又汝と女とは長へに敵となり、女も汝の頭を碎けば、汝も亦女もろとも、女の子孫までも讐と狙へ」といひ、女の方に向つて「汝も夫を我に背かせたから、女の生命のあらん限り、悲みと苦みの心遣ひとは絶間もなからう」と語り、アダムには「汝も妻の語を聞いて我の誡言に背いたから、汝も罪を受けねばならぬ。今よりは土地より生ひ出づる物を取るために苦勞せよ。土地には荊棘の生ひ茂るを見よう。

ケルビン
Cherubin

柳澤淇園
名は里恭
大和郡山藩の家老
寶暦八年（一七五八）歿す

汝が食を求めるには、命あらん限りその土地を耕し、種を播き、額に汗を流して働かねばならぬ。かくて、やがては汝の身の原因たる土塊（つちくれ）に歸るであらう。」と嚴かに申渡した。神の掟に背いた罪で、アダム・イヴは最早エデンの樂園に歸り來る事のない樣に、園の門に焔の劍を持つた天使ケルビンを立たせて番をさせた。アダム・イヴが樂園から此の世界に追ひ出されて、額に汗して働く樣になつてからこの方、まだ誰も其の園に入る事を許されないのである。（聖書物語）

一二　堪忍

一

柳澤淇園

或人文盲なるものを意見して、「世の交りは他の事はいらず。唯堪忍の二字をよく守るべし。」といへば、文盲の人は頭を傾け「かんにんとは四字にて侍らずや。」と指をもて數へ、「御許はおぼし違へなるべし。かんにんとは四字にて侍る。」といへば、異見せる人言ふ「愚昧なる人かな。堪忍とはたへしのぶとよみて、二字なり。」といへば、又頭を傾け、「たへしのぶならば又一字ふえたり。五字となり侍るべし。何と仰せありとも、我等は四字と思ひ侍れば、四字にてかんにんはいたし侍るなり。」といへるに、その人又言ふ、「汝の如き愚昧の文盲は實に諭しがたし。人に似て蟲同樣なり。おのれがまゝにすべし。」と、大いに憤りければ、文盲の人笑ひて、「何とも仰せある

べし。我等はかんにんの四字を知り侍れば、悪口せられても少しも腹立ち侍らざるなり。」とて笑ひ居たりとぞ。

二

予が友としける平澤某といふ士は堪忍づよき人にして、ある時、主用ありて人多く具して行きける道の程にて、二階より齒磨を使ひて吐きたる唾のあやまちて平澤が着せる上下にしたゝか懸りたれば、供人大いに憤り、その家に入り、唾を吐きかけたる者を引出さんとす。平澤止めて、暫しこの家を借るべしとて、家に入りて、挾箱より着替の上下を取出して着替へけるに、その家の者ども大勢出でて詫ぶるにぞ平澤申しけるは「過なるべし。重ねて心をつくべし。」とて出

で行きぬ。供人言ひけるは「いかでそのまゝに宥し置き給へるぞ。」と言へば「けふは大切なる主用なり。かゝる些細の事に隙取るべきことにあらず。わが常に守れる堪忍はこの事なり。」と言へり。

その後、また私用ありて、その供人を引連れ出でけるに、折しも夏の頃とて溝のけがれ水を打ちてありけるが、平澤の袴の裾より下を汚せり。供人大いに憤り、己に打擲にも及ばんとせしを、押止めて行きければ、供人申しけるは「いふがひなきことにて候。」と言ふに「さにはあらず。けふは私用にて出でたり。私に人を罵ること、士たる者の本意に違へり。たゞ堪忍だにせば、恥辱といふことあるべからず。」と言はれ

しとぞ。（雲萍雜志）

一三　若葉の雨

薄田泣菫
名は淳介
大阪毎日新聞記者

野も山も青葉若葉となりました。この頃は――とりわけて今年はよく雨が降るやうです。雨といつてもこの頃のは、草木の新芽を濡らす春さきの雨や、もつと遲れて來る梅雨季（つゆどき）の雨に比べて、また變つた味はひがあります。春さきの雨はつめたい、また梅雨季の雨は憂鬱に過ぎますが、その間にはさまつた晩春の頃の雨は、明るさと快活さとまた暖かさとに充ち溢れて、銀のやうに輝いてゐます。春さきの雨は無言のまゝ濡れかゝりますが、この頃の雨はひそ〳〵と聲を立てゝ降つて來ます。その聲は空の靈と草木の靈との囁きで、肌ざはりの柔かさ、溜息のかぐはしさも思ひやられるやうな靜かな親みをもつてゐます。時々風が横ざまに吹きつけると、草木の葉といふ葉は、雨の雫が首筋を傳つて腋の下や、乳のあたりに滑り込んだやうに、冷さとくすぐつたさとで、たまらなさうに身を搖ぶつて笑ひくづれてゐるらしく見えるのも、この頃の雨でないと味はれない快活さです。

この快活さと明るさとにそゝのかされて、蟇蛙はのつそりと草葉の蔭から這ひ出して來ます。どうかした拍子に雨垂が顏の上に落ちかゝると、不器用な手つきでそつと鼻さ

一茶　小林一茶の句に雲を吐く口つきしたり蟇蛙罷出でたるは此の藪のひきにて候などといふのがある

きを撫でまはしてゐます。そして時々立ちどまつて、昔馴染の俳人一茶が、旅姿のまゝでぐしよ濡れになつてゐはしないかと氣づかふやうに、きよろ〳〵とあたりを見まはしてゐます。蟇蛙よ、お前が尋ねてゐるらしい一茶は、いゝ俳人だつたが、彼の魂は長、年の悲みと苦みとのためにねぢけてゐる。明るいこの頃の雨に一緒に濡れるには、ふさはしからぬ友達の一人です。お前にはもつといゝ友達がそこに出て來ました。

それは蟹です。蟹は土まみれの甲羅のまゝで、庭石のかげから横柄な身ぶりで這ひ出して來ました。鋼鐵製の蒸氣機關の模型か何かのやうに頑丈づくりで、ぶつ〳〵泡を吹

クルップ會社　ドイツのエッセンにある鐵工場 Krupp

ショペンハウエル　ドイツの哲學者 Arthur Schop nhauer (1788—1860)

いてゐるところは、どう見てもドイツ人の考案したらしい生物で、甲羅のどこかに「クルップ會社製造」とでも極印が打つてありさうな氣がします。私の家は海近い砂地に建つてゐるせゐか、蟹が澤山ゐて、梅雨季になると、壁を傳ひ、柱にすがつて疊の上にまで這ひあがつて來ることがよくあります。蟹よ、お前と蟇蛙とは、それ〴〵異つた生活はしてゐるが、どちらも自尊家で、自尊家につきものゝ孤獨性をもつてゐるところはよく似てゐるやうです。むかし厭世哲學者のショペンハウエルは、イタリーの都に旅を

ショペンハウエル

バイロン
George Gordon Byron
(1788—1824)
英國の詩人

して、ところの人たちが自分に對しては一向冷淡なのにひきかへて、同じ時同じ都に來てゐた厭世詩人のバイロンに對しては、まるで王侯をもてなすやうな歡迎ぶりなのを見て、ひどく機嫌を損じて、そこ〳〵に旅を切りあげたといひますが、

バイロン

蟹と蟇蛙とでは曲者揃ひで、不器量なことにかけてはい〻取り合はせですから、お互に機嫌を悪くしあはないですむことです。

木の上ではまた、雨蛙と蝸牛とが雨を樂しんでゐます。雨蛙は聞えた獨唱家ですが、蝸牛はまた風がはりな沈默家です。一人は葉から葉へ飛び移りますが、一人は枝から枝へ滑り行きます。雨蛙は藝人のやうに着のみ着のまゝでどこへでも出かけますが、蝸牛は靈場めぐりの巡禮のやうに自分の荷物は一切合財ひつくるめて、背にしよつて出かけます。二人はたまに廣い青々した芭蕉の葉の上で出合ふことがあります。互に目禮のまゝ、言葉一つ交さないでさつさと往き過ぎてしまひます。彼等はどちらも腹一杯雨を樂しみ、雨を味はひ、また雨に戯れるに餘念がないのです。ぐづ〳〵してゐると、雨はいつ晴れ上るかもしれないのを知つてゐますから。

夜がふけて、湯槽にのんびり體をのばしながら、しと〳〵と降り續く雨の音を聞く氣持は私の好きなもの〻一つですが、それにはこの頃の雨がもつともふさはしいと思ひます。

（太陽は草の香がする）

横山桐郎
農學博士
昆蟲學者

一四　優曇華

横山桐郎

「兄さん、又お祖母さんの迷信よ。」

私が机に向つて本を讀んで居ると、右手の障子をあけて入つて來るなり、妹は大聲でかう言つて私の横にぴたりと坐つた。

「又例の優曇華の御說法か。」

「え〻さうなの、今本郷の叔母樣がいらつしやつてるのよ。私御茶を運んで行つたの。さうするとお祖母さんたら早速昨日の優曇華の話をしていらつしやるの。本郷の叔母樣も、話上手でせう。だからそりや大變よ。お祖母さんたらもう夢中で、何とおつしやるかと思つてゐるとね、かうなの。『昨日御晝頃庭へ出て、何氣なしに御池の傍のさるすべりの枝を見るとその葉の裏に何か變なものが付いて居るので、怪しいと思つてよく見ると、どうでせう、それが優曇華ぢやありませんか。これは〳〵珍らしい事だと思ひましてね、そつと葉ごと取つて皆に見せてやりましたんですよ。何でも優曇華の花が咲くと好い

事があることもあるし、又咲き所によると大變惡いんだつて言ひますから、とにかく氣をつけなければならないと思ひましてね、注意しましたんですよ。何でも家の壁に咲いたのは惡いさうですが、樹の葉に咲いたのはいゝんだつて言ふぢやありませんか。ですからまあ安心はしてるんですけれど……お前一寸昨日のあれを持つて來て叔母樣にお目にかけて御覽、用簞笥の上に紙に包んであるのがさうだからね……』それで私がその紙包を持つて行つたのよ。さうすると、それをさも勿體らしく叔母樣に御目にかけていらつしやるの。ところが叔母樣は又叔母樣で、それをいかにも恭しく受け取つて感心

していらつしやるんでせう。私それが蟲の卵なんだと思ふと、もうをかしくつて〳〵吹き出したくなつてしまひましたは。

「それでお前は、それは蟲の卵ですつて說明でもしたのか。」

「どうして、そんな事言はうものならそれこそ大叱られでせう。だつてお祖母さんは、優曇華と言へば、千年とか萬年とかに一度咲く珍らしい花だときめ込んでいらつしやるんですもの。」

「それもさうだな、それでまだ何かおつしやつたかい。」

「えゝ、何でもね、靑いのがいけなくつて、鬱金色のがいゝんだとか何とかおつしやつてたは。そんな事ないはねえ。」

「無論さ。だけどさういふ御前だつて實をいふと、優曇華の正體なるものに就いて詳しい事は知らないんだらう」。

「まあさう言へばさうですは。だから私ね、今兄さんに、よく聞かうと思つて來たの。其の優曇華を產む草蜻蛉といふ蟲を見せて下さらない。」

「見たけりや見せてやつてもいゝ。」

私は床の間に積んである標本箱の一つを取つて彼の女の前に開いて見せた。

「まあずゐぶん優しい蟲ね。私もつと〳〵恐い蟲かと思つてゐたは。これならちつとも氣味が惡くないのね。」

かう言ひながら彼の女は、針に刺されてしなびてゐる草蜻

蛉を撮んで見た。それは一寸ばかりの草色の細い體つきの、そして薄絹のやうな四枚の翅をもつた、見るから弱々しい蜻蛉である。其の金象眼を施した樣な二つの眼、其の間から出てゐる線の如く細い二本の觸角の作り、すべてが彼の女にとつては驚異であつた。

「ずゐぶん綺麗なかはいゝ蜻蛉ですね。一體ふだんは何處に居るんですか。」

「ふだんとは。」

「だつてめつたに見ないぢやありませんか、こんな蟲。」

「さうだ、晝間は樹の蔭や草の葉の裏にじつと止つて居て、夕方か、朝早く飛んで出る習性があるんだ。それから夜

よく電燈に來て、電燈の笠に卵を産む事があるよ。」

「卵つてそれが優曇華でせう。兄さん其の卵を産んでる所を御覽になつた事がありますか。」

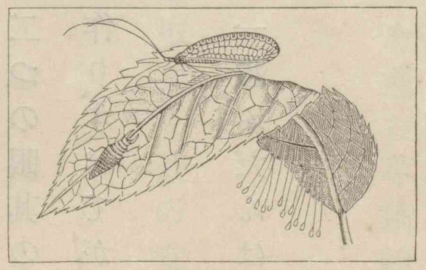
「あるとも。」

「御存じなら敎へて下さい。」

「今夜でも氣をつけて居て、若し産んでゐたら敎へてやらう。」

やつと妹は去つて、私は讀書に復れた。

それから一週間程經つた或晩、讀書に疲れた眼を電燈に向けて、ぼんやりと見詰めて居ると、ふと笠の裏側にうすものを着た草蜻蛉を見つけた。そして頻に



草かげろふ

尻をもぢ〳〵させて居る。よく見ると、後ろの方にもう二三本の絲が立てられて、その先に卵が産み付けてある。私は大急ぎで妹を呼んで來て、優曇華の出來るところを見せてやつた。今此の蜻蛉は、其の綠の紐のやうな胴を弓なりに曲げ、頻に上げたり下げたりして、尻の端でそつと笠の面を叩いてゐる。四五度そんな事を繰返したかと思ふと、腹の先を笠の面にぴたりとつけて暫らくじつとして居たが、やがて靜かに離し始めた。すると細い絹のやうな絲が笠の面とお腹の先とを結びつけてゐる、それが胴を上げるにつれて延びてゆく。そして此の絲が三分程になつた時、お尻の先から、棗形の淡い綠の卵がひよつこりと現れ、今の絲

の先にぽつりと載せられた。これで一回のお産が終つたのである。彼の女は又すぐ次のお産に取りかゝつた。一度の御産に三十秒ばかりかゝつた。そして二十三本の絲を立て、二十三箇目の卵を産んだ時お産はやんだ。

電燈の笠の硝子の面には、細い銀の絲がきら〳〵と輝いて居る、それは過ぐる日、庭のさるすべりの樹で祖母が見つけて、吉凶の前兆とした優曇華の花と全く同じものである。

これを見た妹は驚きの目を瞠つて今更のやうに感心した。

「まあ、全く不思議ですね。私始めて見ましたは。」

「何も不思議な事はないよ。」

「そりや兄さんにはさうでせうけれど、私には不思議ですは。この卵が一體どうなるのですか。」

「どうなるつて、一週間もすると、あの棗形の卵の先が割れて中から大きな顎と、體に澤山刺の生えた、一寸いやらしい蟲が出て來る、それが草蜻蛉の仔蟲だ。そしてこんな處ぢや駄目だが、樹の葉や枝に産み付けられたなら、生れた仔蟲は此の銀の絲をつたつて降りて、蚜蟲（あぶらむし）――知つてるだらう、植木の新芽にたかつて困るやつさ、『ありまき』とも言ふ蟲――を食べて大きくなるんだ。そしてすつかり大きくなると、長さ一分二三厘の玉子形の繭を造つて其の中で蛹といふものにかはる。それから二週間もすると蜻蛉になつて飛び出すのだ。そして仔蟲は醜いけ

れど、我々には味方だ。何しろ大變な食ひしんばうで、よく蚜蟲を食べてくれるから益蟲仲間に入つてゐる」。

「ぢや親の蜻蛉は何を食べてゐますか。」

「親か、親もやつぱり蚜蟲を食べてゐる。だから親もやつぱり益蟲だ。」

「姿に似合はない亂暴者ですね。それは一體何日位生きてゐますか。」

「まあ、この蟲の壽命は一ケ月半位だらうな。其の間に六百位の卵を産み、一日少なくとも百匹位づつ蚜蟲を食べるといふから、一ケ月半では、およそ四千五百匹食べる譯だね。」

白鳥省吾
詩人

「今夜お祖母さんがいらつしやれば、お目にかけるのに。私あしたでも此の卵と蟲とをお目にかけて説明してあげませう。」

彼の女はまだ電燈の笠にじつと止つてゐる草蜻蛉を紙に包んで自分の室へもつて歸つた。

其の後彼の女はそれを祖母に見せて説明したかどうか聞かなかつた。忙しい私はその儘忘れてしまつたが、それつきり祖母も優曇華の事は言ひ出さなかつた。(蟲)

一五　村の哀愁

白鳥省吾

溫泉宿の暮春の午後。

ソファ Sofa 長寢椅子

二階の縁のソファに倚つて竹藪にあたる明るい日光をながめ、寂しい川瀨の音を聽きながら、微かな湯疲れの退屈さを感ずる私は、附近の漫歩を思ひ立つた。街道をさしはさむ寂しい部落、それはたゞ一軒のこの大きい溫泉宿の華やかな空氣、整然たる設備とは正反對の衰頽したものであつた。私がこの街道の土を踏むことは十餘年ぶりであるが、いかにも總べてが昔のまゝである。歩みゆくに部落の家並はやがて疎らになり、田や畑が兩側に見え、二三町へだてた右手を川が荒い瀨の音をさせて流れてゐる。路傍の古い柳の枝が一齊に青い芽を吹いてゐる。左手の田圃には數人の農夫が田の土を唐鍬で起してゐて、その向ふの桑畑

らしい中に殘んの雪かと疑はれるやうに點在してゐるのは牛の群であるらしい。

あんなにいゝ天氣だつたのに、空は俄かに曇り出した。眉に逼る黃褐色の粗い羅紗のやうな山々の肌、その間の奥の方に一つだけが斑に雪を戴いてゐる。空が曇つてゐるためか眺望が馬鹿に狹く、陰氣に思はれる。この街道を次第に溯つて奥の方の次の溫泉まで行つて見たいといふ輕い氣持さへ持つてゐた私の漫歩は、思ひもかけぬ寂しい重い氣分に變へられて來た。少年時代の私の眼に映つたこの邊の風景はもつと廣々とした輝かしいものであつたのに、これでは便りない寂しさを感じさせるだけだ。

空はだん〳〵暗くなつて、思ひがけなくも大粒の雨を落して來た。急いで近くの農家の軒下に駈け込んだが、庇が狹いのでやゝ横降りの急雨は、私の足の方を遠慮なく濡らすのである。その縁に身裝もきたない姉らしいのと遊んでゐた女の子は、見馴れぬ私の姿を見ておびえ泣きながら、姉の背におんぶしようとするのであるが、その垢まみれの着物や、豚の尻尾のやうな髪も佗しい。

湯の宿（群馬縣四萬溫泉）

暫くすると雨は小降りになつたので、そのひまにと宿の方に急いで歩き出したが、またさつきよりも大粒の急雨が沛然としてやつてきた。あいにく路の兩側に何の物蔭もないので濡れながら駈けると、左側に路を少し隔てゝ小さい家があるのでそこへ雨を避けようと逃げ込む。さてその家は庇といふものは殆どないので、雨の避けやうもなく困つてしまつたが、見ると同じ屋根の下に一坪足らずの物置らしい空地がある。薪を置くところらしく、枯れた杉葉が少し積まれてあるだけである。私はその土間に身を入れたが、雨は疎らに屋根を漏れて顔を生溫(ぬる)く打つので、破れた屋根を仰ぎ且周圍を見廻しながら益身を小さくして犬の

やうに蹲まつた。ひどいあばら家で、壁は中から塗つただけの片側壁で、その骨に用ひた煤けた竹が外部にむき出しになつてゐる。家の内は六疊一間位の大きさらしく、ひつそりして何の物音もない。一體此の家に人が住んでゐるのかしら。それとも家族が田畑に働きに出でゐるのか。またどうやら老人でも留守に殘つてゐて、もぞくさと身じろきしてゐるやうなけはひも感ぜられる。しかしそれは屋根や土に降る雨の音であるかも知れない。

そこへ水汲むための手桶をかついだ少年が、雨に驚いて笑ひながら飛び込んで來る。その手桶は古いのに新しい板をモザイックのやうに當てゝ修繕したもので、新舊あざや

Mosaic　モザイック　大理石や硝子などの小片を寄木細工の如く結合したもの

山の湯（兒玉素行筆）

新井白石
名は君美
徳川幕府の儒者
六代將軍家宣に
重く用ひられた
享保十年(一三八五)
歿す
若君
竹千代
後の三代將軍家
光
大殿
徳川二代將軍秀
忠

かに見える。

雨は止みさうもない、何といふ氣まぐれの雨だらう、山根であるこの邊の天候は實に見當がつかない。めえ〳〵と牛の啼く聲が遠くでする。さつき白く斑に見えた牛の群も濡れてゐるのだ。私の心に滿ちてくる極りなき哀愁は、いまこの薄暗いあばら家に蹲まつてゐることがいかにもふさはしく感ぜられた。

一六　松平信綱

新井白石

或時、若君、大殿の御寢殿の屋の軒端に、雀の巣をくひ、子を生みたりしを、こなたより御覽じて、欲しがらせたまひ、「長四郎

長四郎
松平信綱の幼名

とりて參らせよ」とあり。長四郎年十一歳のときなれば、いかにも叶ふまじきよし辭しければ、「書は驚きて飛去ることもありなん。巣くへる處をよく見置きて、日暮れてこなたの屋の軒の端さして登り、彼處に忍び行きて取るべし。大人は身重く足音もしなん。只汝取りて參らせよ」と侍ふ人人の教へしかば、力なく、日暮れてこなたの屋よりして傳ひ傳ひ行く。既に御寢殿の軒に至りて取らんとせしに、踏み損じて御坪の内へどうと落つ。

將軍家御刀取つて障子引明けたまへば、御臺所燈火取つて出でさせたまひ、御覽ずるに長四郎にてありけり。將軍家不思議に思召して、「汝は何しにこゝには來りぬるぞ」と御尋ねありしに、「今日の書、この御殿の屋の軒端に雀の子を生みたるを遙かに見て、餘り欲しさに參りて候」と申す。將軍家「いや〳〵、おのれが心にはあらじ。誰が教へけるぞ」と色々に御推問あれども、幾度にても初め申しゝ言葉に變らず。「おのれ事の由ありの儘に申さず、爭ふこそ年にも似ぬ不敵なれ」と仰せられて、大きなる袋の中におしいれて、口を御手づから封じ給ひ、柱にかけさせ給ひ、「事の由ありのまゝ申さざらん程はいつ迄もかくて候へ」と仰せけれども、尙爭ひ申すこと初めの如し。

夜已に明けて、常の御座に出でさせ給ふ。御臺所は夙く心得させ給ひて、彼が幼き心にて、身の悲しさを顧みず、「竹千代

君の仰せなり」と申さゞることを深く感じたまひて、女房たちに仰せて、朝餉召して「これたうべよ」とて賜ひて、又御手づから元の如くに縫はせ給ひて、置かせ給ふ。畫の程將軍家入らせたまひ、又御推問ありしかど、終に言葉を變へず。御臺所御詫言ありしかば、さらば向後の事を慎むべきよし仰せて御宥しあり。

將軍家、御臺所に向はせ給ひ「彼が今の心にておひたちたらんには、竹千代殿の爲には雙なき忠臣にて侍らんものぞ」と殊の外悦ばせ給ひきとなり。（藩翰譜）

一七　蜀山人の盆燈籠

饗庭篁村

蜀山人
太田直次郎
南畝と號す
寐惚先生といふ
和漢學者
特に狂歌の名人
文政六年（二四八三）歿す

饗庭篁村
名は與三郎
小説家
東京朝日新聞記者
大正十二年歿す

文化元年の頃とかや、小石川陸尺町に庄助と呼ぶ男住めり。日傭又はかつぎ商ひなどして世を渡りしが、七月十二日の朝、小石川壽經寺の門前に立つ草市へ行燈燈籠と云ふものを持行きて賣りけるに、如何にしけるにや、買ふ者更になく、賣れしはわづか十ばかり、殘りしが多ければ、力を落し、情なき顏してかつぎ歸りけり。

陸尺町
傳通院の前
今の大門町

途中にて日頃出入る太田南畝翁の許に立寄りて、臺所の者に「偖々困る事かな、この盆は如何にして過し申さん。今朝の市にこれほど燈籠賣れ殘り候。この分にては明朝神樂阪の市に持行き候とも、また今朝の如くなるべし。もとより手細工にせし事にはあれど、聊か資本もかゝりたり。こ

神樂阪
牛込にある

女將（オカミサン）

の分にては水も呑まれ申さず。」とかこちけり。

南畝翁は座敷にて之を聞かれ、手に持つ盃を下に置きて、「かの聲は庄助にあらずや。」と問はるゝにぞ、傍の者、斯樣々々にて、「又かの泣男がかこち申し候。」と言ひければ、翁は臺所に出られ、「儲も氣の毒なる事よ、顋の下もあるべし。」といはれければ、「それは有難き事に候。いかに致すべき。」と、翁の顏をいかにも有難げに仰ぎ見て問ふに、翁は白紙五帖ばかり取出し、「これにてその燈籠を張替へよ。

太田南畝

何か書きてやらん。」といはる。悅びて立歸りしが、忽ちに百あまり張替へて持て來たれば、翁は例の草書にて狂歌やら發句やらなぐりつけて渡されけり。

庄助は頭を搔きつゝ一禮を述べて、荷ひ歸る途々、「蓮の花を紅入りにて書いてさへ賣れぬに、いかに先生なればとて、かかる冗書の反古張にては買人はあるまじ。さりながらあれ程に仰せられし事なれば、先づ明朝、神樂阪の市に持行き、賣れ殘りたらば、その事を申して歎きつき、二百疋も、借りて外商ひの元手にせん。」と工面顏にて足も重く二三町歩む向ふより、侍一人來かゝりしが、供の者に言付けて、「その燈籠は賣物か。」と問ふ。儲はと悅び、「いかにも賣物に候。やう〳〵

正二十五文

傳を求めて先生に書いて貰ひまうしたるにて、心あても有りて拵へ候なれども、これほどは入り申さず候。お望ならば差上げ申さん。」と云ふに、「價はいか程ぞ。」と問ふ。幾許と云ひてよき事やら、庄助はたと行詰りしが、思ひ切つて五十文と云ふ。「その直にて二つくれよ。」と百文渡して買行きたり。又あとより通りかゝりし人、「それ賣るならば買ひたし。」といふ。今度は息を一杯に吹きて、六十四文といふに、いふがまに又買行きたり。あとより又此方へも二つ、我にも一つと、おのが家に歸るまでに二十ばかりも賣れて、凡そ一貫二百文骨折らずに取り、かくて女房に話せば、「誠に寐惚様は生佛様なり。有難き事なり。明日は早くより持出で給へ、私

も參りて手傳ひ申さん。」一人にては手も足るまじ。一つ盗まれても五十と百の損なり。」と女のいふ。

夫婦は翌朝早起して神樂阪に到り、並ぶる間もなく、「蜀山人の書いたる燈籠とは珍し。」と一人立止りて價を問ふ。庄助思ひ切つて百文と言へば、「さもあるべきぞ。」とて買行く。女房、夫の袖を引き、「百にても直切らずに買つて行かるゝからは、二百文といふとも賣れ申さん。」二百文といひ給へ。」と、智慧をつくるに、庄助額に手を加へつゝ、「二百は餘り高かるべし、さらば百五十文。」といふ。夫より百五十文にて六七十を賣り、遂には先見明かなるその妻の言の如く、「二百文より一文も引かず。」と肩を怒らし、まだ五つ半にもならぬに賣り切

れたり。錢二十貫程、金にして三兩ばかりになりし故、夫婦こけつ轉びつ翁の許に到り、亭主を搔きのけて女房口を出し、「有難い。」を數十遍のべて、「いかにも先生は生神樣なり。」と、今度は神あしらひにしつゝ悅び歸りきとぞ。翁が醉餘の戲よく枯骨に膏すといふべし。（雀躍）

一八　獨逸の夏の家庭

名倉聞一

名倉聞一　新聞記者

アプリルウェッテル　April-wetter

獨逸の夏は非常にいゝ。天候の變り易い四月の所謂アプリルウェッテルがすんで五月に入ると、森も野原も人の家の庭園も、青葉と花とで飾られてしまひ、それから九月の終り頃までは殆ど毎日晴天で、よしその間に一日や二日雨の日はあつても多く驟雨で、氣持のいゝこと夥しい。

何しろ北の國のことであるから冬は日が短く、夏は恐ろしく日が永い。冬は午後三時半頃から電燈がつき、朝の九時はまだ薄暗い。これに反して夏は朝の三時半頃から明るくなつて夜九時頃漸く電燈がつく。歐洲一般に冬は社交の季節であつて、舞踏・音樂・觀劇に長い夜が利用せられ、夏は野外の季節であつて、旅行・登山・避暑に雨の少い長い晝が利用せられる。

夏は暑いと云つても獨逸、殊に北獨逸の伯林あたりでは大抵日本の六月位の氣候が最も暑い頃上である。白靴でも穿かうか、アルパカの上着でも出して着ようかと思ふのは

アルパカ　Alpaca　アルパカの毛で織つた羅紗

チョッキ Jacket ジャケットの轉ん

ナフタリン Naphthaline

クリーニング Cleaning 洗濯

七月の終りか八月の初旬に三日か四日位あるだけで、あとは日本流の合服のチョッキをぬけば十分にしのぐことが出來る。

獨逸の家庭生活

いまこゝに夫婦に子供の一人二人ある家庭について云つて見ると、日本でも大分似てゐるが、五月になれば主婦は冬に用ひた毛皮や冬着をよく干して、ナフタリンを入れて簞笥にしまつたり、或はクリーニング屋に出したりして、その代りに夫や自分や子供の夏服の用意をする。そして

シーツ Sheet

ハンケチ Handkerchief

タオル Towel

レース Lace

サラッド Salad 生菜料理

キャベツ Cabbage

トマト Tomato 蕃茄

夏中の家庭の豫算を作る上に於てはシーツ・卓かけ・ハンケチ・タオル、その他自分や子供の着物の洗濯代を澤山に見つもる。夫は夏になつても日本の如く白服や白靴は用ひないから、見た色合の上ではたいした變化はないが、主婦は絹のレースの薄い涼しさうな夏服になり、白い靴下などを用ひるから、夏の女の服は見ただけで如何にも夏らしい感じがする。

家庭で用ひる料理の材料も夏になると野菜が多くなる。サラッドに用ひるちしや・きうり、煮てたべるキャベツ・トマト、その他澤山の野菜が食膳に供せられる。果物としては夏の初めの苺から櫻桃・桃・李・梨・林檎・葡萄、外國から來る蜜柑

メロン Melon
アイスクリーム Ice-cream
シトロン citron
サイダー Cider

その他メロンや西瓜などもあるが、これは高くて先づ普通の人は食べない。櫻桃と梨と林檎は獨逸には非常に澤山あり、南方に行けば葡萄がまた豐富で甚だ安い。

飲料としてはアイスクリームもあるが、これは多く料理店のもので、しかも佛國や米國ほど澤山には用ひない。アイスクリームの機械などを家庭で買つて置いて作ると云ふ樣なことは甚だ少い。鑛水やシトロン・サイダーの類は盛に用ひられる。葡萄酒は人々によつて好みの相違があるが、人肌にあたゝめて出す習慣の赤葡萄酒よりも、氷で冷やして出す白葡萄酒の方がより多く夏向なので、夏の食卓にはどうしても白葡萄酒の方が多く用ひられる。

パン ポルトガル語 Pao の轉訛
バタ Butter
コーヒ Cafe
バルコン Balcony 露臺

朝は三時半頃から明るくなつても、そんなに早く起きることは出來ないから、先づ七時半頃に起き、主婦はパンを切つたり、バタを丸めたり、コーヒを沸かしたりして朝食の用意をする。夏はどうしてもバルコンが多く利用せられる、朝食などもバルコンですることが多い。晝食をすませば二時間位男女にかゝはらず晝寢をするものが多い。午後の四時から五時にかけて、バルコンでコーヒを飲む。この時には主婦は多く既に午前の着物を脱いで夕方の着物を着て(日本ならば糊の利いた浴衣と云ふところ)バルコンのコーヒの卓につく。林檎や李を入れて燒いた手製の菓子などが出て來る。バルコンの上には、もつかうばらや蔦など

で屋根の樣なものが出來てゐたり、バルコンの手すりの處には金魚草・齒朶・蔓草などを植ゑた鉢などが並べてあり、花の彩や草の綠などが眼を樂しませる用をすると同時に見透されない樣に小蔭を作つてゐる。バルコンにある卓や椅子は多く籐細工であつて、白や綠に塗つたのが多い。蚊は居らず、蠅は少なし、そんなに暑くはなし、月のある夜などは、星が流れたり、遠くで煙火が上つたりして、夏の夜のバルコンは誠に趣のあるものである。

午後のコーヒの後では、夫婦つれ立つて子供をつれて、公園地や郊外の森を散歩する。林檎の花が澤山咲いて、それに虻や蜜蜂が群れて居る。夕方になれば鶯が涼しい聲で鳴く。郭公が何處か森の奥で鳴いてゐる。チーヤガルテンの薔薇許り植ゑてあるローゼンガルテンでは七月の月に入ると、丁度白比谷の躑躅などの樣に午後から夕景にかけて澤山に植ゑてある薔薇を見に、押すな押すなといふ程人が集つて來る。薔薇は氣候の加減で、伯林ではそんなによくは出來ないのであるが、何しろ夏の花の王として大變な評判である。

夏は學校が休になり、官衙・會社には夏の休があるので、日本と同じくどし〳〵避暑地へ人が出て行く。何も伯林あたりは避暑をする程の暑さではないが、それでも競爭の形で流行してゐる。

チーヤガルテン
Ziergarten
ベルリン市にある公園
ローゼンガルテン
Rosengarten
薔薇園の義

タイピスト Typist
リュックサック Rücksack 背負嚢
ボート Boat

ところが獨逸は日本の樣に海が近くないから、ごく上流の人は獨逸の北海岸や或は白耳義・和蘭の海岸まで避暑に出掛けるが、それは時と金とを要するので、普通の人は獨逸に澤山ある湖畔へ避暑をする。

夏休がすんで學校や會社などへ出る時、特に女タイピストなどは、避暑にでも行つて色が黑くなつてゐないと幅が利かないので、必ず何等かの方法で日に燒ける心掛けをする。友人家族などで一團體を作り、皆リュックサックを背負つて、それに炊事道具を入れて四五日の野宿旅行をするのもある。また湖畔に夏だけ百姓家の二階を借りて避暑するものもある。伯林の家庭から毎日ワンゼーなどへボート・水泳などに通つて夏休を愉快に過すのもある。

（海外點心記に據る）

室生犀星
名は照道
詩人小説家

一九　星

室生犀星

雲と雲との間に、
ずつと遠く一つきり光る星、
その星は消えたり、
またあらはれたりする不思議な星。
ちゞんだり伸びたりする光、
雲と雲との間にそれがちらつく。

毎晩こちらからのぞいてゐると、
あちらでも毎晩のぞいてゐる。
ながくのぞいてゐると、
ます〳〵親切に鋭くなる星。

電話のやうなものが星と星との間に
いくすぢも架けられ、
絲をひいて
下界のわたくしの方まで
寂しい聲をおとしてくる。（田舍の花）

三宅やす子
作家
批評家
故郷
作者は京都市富小路竹屋町に生れた

二〇　故郷の山

三宅　やす子

私が生れ故郷の京都を離れたのは、十歳に滿たぬ頃であつた。

話に聞く東京といふ處、其處は恐しく女が威張る處だと聞かされてゐた。まご〳〵してゐると、突き飛ばされる樣な氣早な處だと話した人もあつた。

「そんな處に行くのは、私怖い。」

そんなことを云つて、移住の日を嫌つて居たのであつたが、家の都合で或夏一家を纏めて東上することになつた。見送の人が大勢來た。

其の中の一人が持つて來た大きな枇杷の籠の傍で、私は汽

車が出て琵琶湖のあたりに來るまで、腰掛に顔を埋めて泣いてゐた。

「京都が戀しい。見捨てた今までの家が戀しい。」

さう云つて泣いて離れた京都の町を、私はそれから幾年見なかつたらう。

小學時代から女學校時代、やがて家庭を持つて、樣々の世の憂さ喜ばしさを嚙みしめた今日まで

家庭を持つ　明治四十三年理學博士三宅恒方に嫁す

「一度行つて見たい。」

と度々口にしながら、私は遂になつかしい地を踏む時を持たなかつた。

が、末の兒が少し手離れかけた或年、私たちは、

「今年こそ。」

と計畫して居たところ、それは旅の支度も整へかけた出發の四五日前から、私が急に病氣になつたのでやめになつた。

「春になつたらよくなるだらう。そしたら其の時こそ家族連れ立つて。」

と久しくすることの出來なかつた、少しの長い旅行に上れるだらうと云ふ樂みもあつた。

そんな事を考へて居た春に先立つて、今度は子等の父を失つた。

又一年が早く旋つた。

「今年はね。」

今度は待ちあぐんだ長女が言ひ出した。

「行きませう。」

私は思ひ定めた。そして旅の心づもりをした。

ところが人が知らせてくれたには、

「今年は博覽會で、汽車が込んで大變です。秋に延した方がよいでせう。」

苦みに旅に行くのはいやであつたので、又此の春の京都行は延された。

「また。」と長女が力を落した。

けれども、實際力を落したのは私であつた。

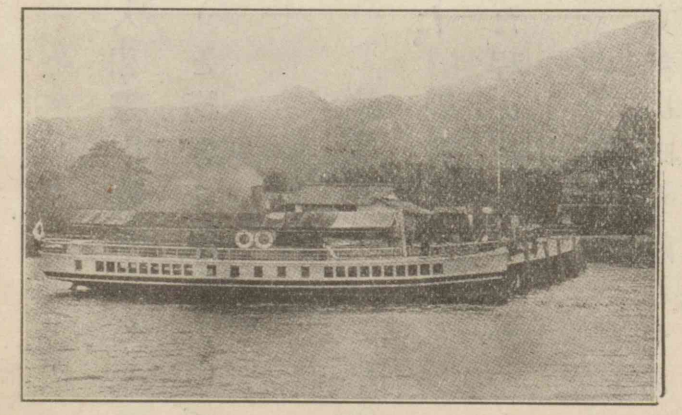
たつた是だけの豫定さへ、色々の事情の爲に實行しがたい

と云ふ事が、堪らなく私に果敢なさを敎へてくれた。

ところが偶然に、或用事の爲に、私は極僅かの日數を京阪で暮す事になつた。

全く豫定を離れて、偶然の機會が、私をあの長い間思ひ離した事のない故郷の土に親しませてくれるかと思ふと、不思議のやうに思はれる。

私は子供等を置いて、只一人、生れてから始めての單身の旅、そして又人の母となつてから始めての長い旅行をした。



琵琶湖

夜東京を立つと、すぐ眠つてしまつた。朝になつて間も無く琵琶湖が眼の前に見え出した。

四邊の風景が、全く關東のと違つて大和畫の樣である。

私はふと、二十年前に、此處を東へ〳〵と横ぎる汽車の中で泣いて居た自分を思ひ浮べた。

凡てはたゞ夢のやうである。

「東京はこはい處ですぞ。」と人が言つた。

其のこはい東京へ來て見たら、思つた程のことはなかつたので、安心したのであつた。

私は、東京はこはいと思つて泣いて京都の町を離れたあの純な、初心な、自分の心がたまらなく懷かしかつた。

Station ステーション

美しい夢ばかり、美しい世界ばかりに身を浸して、世の塵一つも染んでゐなかつたあの頃が、甚だ戀しくなつた。

汽車が七條のステーションに着くと、此の思は一層高められた。

人々の靜かな表情も、堪らなく懷かしい思をそゝつた。

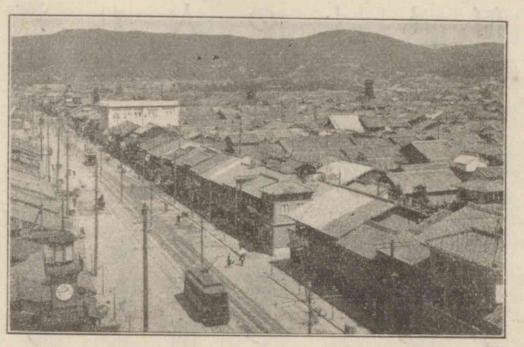
のんびりした幾つかの眼に見送られて、私は宿へ行く車の上から町を見た。

もつと廣いと思つて居た街の幅は狹かつた。

何處にも見覺えがあるつもりで居た町の中には、電車が何臺も走つて居た、さつぱり方角もつかなかつた。

辻々に見る町の名札は、私にかすかに古い樣々の記憶を呼

び起してくれるけれども、皆其の古い繪卷とはかけ離れた一つの町一つの辻であつた。



東山

なつかしさと物足りなさが同時に私の胸に滿ちた。だが、私にひしと強い感じを與へてくれたのは、町に近く聳えた――と云ふにはあまりに低いけれども――東山であつた。

私は東山を見ると、何故とも知らず涙が一杯になる。懷かしいのであつた。

只懷かしいのであつた。

京に育つた私は、子供の頃から東山が一番すきであつた。

大文字の灯
毎年八月十六日に如意ヶ嶽にともす大の字の灯

飛び〳〵に自分の姿が樣々に浮ぶ。

おたばこ盆に結つて、緋鹿の子を掛けた私の木履姿。お白粉を塗つて大文字の灯を待つて居た友の家での宵。父に手を引かれて歩いた山の麓。

あまりに遠い昔が、只此の山を見た瞬間にすぐ眼の前に展開された。

其の頃私を掌の中の寶のやうに愛してくれた父は、世に亡い人となつてからもう年も久しい。が、私には、其の時の父の慈顔がはつきり思ひ浮べられるのであつた。

「故郷の山」。

何といふ懷かしい響であらう。

町は建物によつて變化し、人は絶えず老いて行つて定まらぬのに、そして愛する人は、多く愛するものを殘して世を去つてしまふのに、山ばかりは、あの振分髪の昔から、私をじつと懷かしさうに見おろしてくれて少しの變化もない。勿論私が長へに眠つた後も、山はかうして懷かしい翠を湛へて居るであらう。

自然の美、自然の力の前に、私は只何とも知らぬ涙を止める事が出來ないのであつた。（婦人の立場から）

近松秋江
本名德田浩司
文學者

二一　夏の京

近松秋江

そよとの風も無く、鴨川の岸の柳さへぐんなりと萎れたやうになつて、かん〳〵照りつける眞夏の日を浴びてゐる京都が眼に浮んで來る。其處をけたゝましい響を爲して京阪電車が軋り去る。河原の涼み臺も赫々たる烈日の下に寂しい空家のやうに見捨てられてゐる。眼を上げて比叡や愛宕を仰ぐと、水氣の多い空の彼方に白く霞んで居るのが、まるで汗ばんでゐるやうに見える。それでも四條の大橋は、日盛りにもかゝはらず絶えず人が通つて居る。

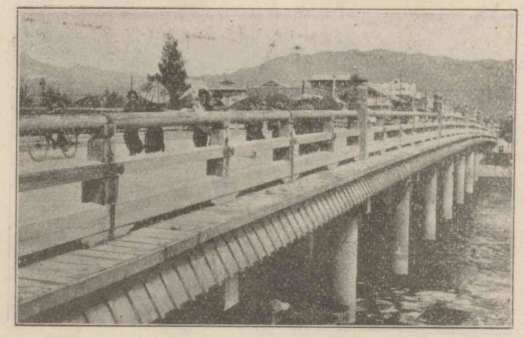
京都の夏は慘酷に暑い。私は或年の夏四月から七月の末まで祇園の近くに居たことがある。暑い京都でも又此の邊ぐらゐ暑いところは無いのである。こゝは正午を過ぎて太陽が少し西に廻ると、鴨川を隔てた對岸の町の屋根の

上に見えてゐる愛宕の山に夕陽が沒するまで、日を眞正面に受けて、情容赦も無くかん〳〵と照りつけられるのである。私は連日九十度を越す暑氣の中に、まるで火のやうになつてゐる疊の上に、じつと身動きもせぬやうにして毎日々々苦熱の六七時間を過すのであつた。そして夕陽が沈んでしまふと、むうつとする二階座敷から屋根傳ひに、川に臨んだ屋上の涼み臺に立ち出る。西河岸の方は日のかげるのも早いので、川原にずらりと並んだ涼み臺はもう早くからさま〴〵に客が出て涼

鴨川原の夕涼

みをしてゐる。

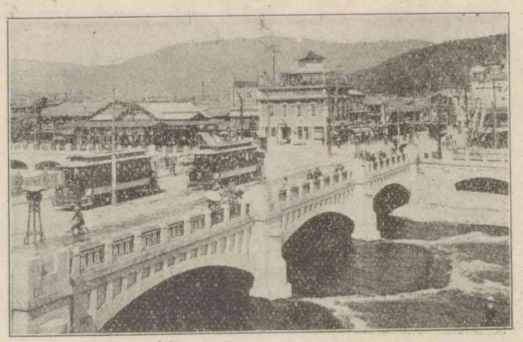
私は宿の小婢に手傳つて、涼み臺に吳座を敷いたり雪洞に蠟燭を點したりする。さうしてゐる中に川原を燒付けてゐた餘熱も段々薄らいで來て、水の面から吹いて來る風が冷く肌に觸れる。上は三條大橋から下は四條大橋わたりまで、涼しい燈火が蒔き散らしたやうに續いて居る。夜の更けると共に、風は水のやうに冷くなつてくる。



三條大橋

京都の夏ぐらゐ暑い處も無いが、其の代りに比叡や愛宕などの高い山で圍まれてゐるから、夜の

涼氣はとても東京あたりでは味ふことの出來ない唯一の慰めである。


四條大橋

私はきつと其の涼み臺の上にあふむけに暗い星の空を眺め入りつゝ無念無想に耽るのである。流星が眼を射るやうに飛ぶ、頻に飛ぶ。淀から山崎の見當の空に落ちる。それを見てゐると、私は豐臣太閤の榮華の夢を聯想する、明智光秀の運命を思ふ。そんなことを色々思つて居ると、此の度は比叡の空から、京都の大空を遠く斜に渡して大阪の方に長く尾を曳いて飛んだのがある。それが消えた後の空を、私は何時までも見てゐた。大阪よりもつと先の淡路の方の空にも飛ぶ。

此の古い都會には、誇つていゝ天然の特長が數々あるが、東京や大阪の如き塵埃の都に比べて、何よりも心地のいゝのは、如何に炎暑燬くが如き夏日の夜でも、空氣が清澄なために、灯の色の飽くまで澄んでゐることである。私は四條の通りに續いて居る軒燈の涼しい色を讃美しつゝ、ひとりで街頭に立つて、うつとりとそれに見惚れることが度々あつた。

其の涼しい灯の瞬く京の夏の夜は、街に黃塵が起たないから、鴨川の畔に出て夏の清夜が樂しめる。

其の夏の夜の涼みも新暦八月十六日の夜、東山にともる大文字の火を最後として、それが濟むと、殘暑はまだなか〳〵烈しいが、朝夕はめつきり涼しくなる。朝夕の涼しさは外の大都會よりも早く來る。

京都の夏の興は七月の十五六日の祇園祭から、例の東山の大文字まで〻ある。大文字の火は、ともつてゐる間はほんの五分間か六分間に過ぎないのであるが、それは京都の夏の夜を彩る年中行事として、夕涼みの景物に無くてはならぬものである。

夏の火は見るからに暑さを思はしめるのであるが、其の火の距離と形とによつて不思議に涼しさを呼び起さしめるのも妙である。東京の兩國の川開きの花火は何と無く暑苦しい氣持もする。それは一つは火が多すぎるからである。大文字の火は僅かに五分位燃えて居ると、後は又すぐ元の漆のやうな闇に復つてしまふ。そこに何とも言へない果敢ない哀愁が殘るのも涼しい心理をさそふのであらう。

兩國の川開　毎年七月二十日頃隅田川で川開きの花火を揚げる

私は京の夏の苦熱を耐へ難く思ふと共に、八月末より早く覺える朝夕の涼氣と大文字の灯とを打留めとして、それから追々夏の終に近づいて行く氣持に何とも言へない詩趣を感ずるのである。

山科の秋茄子が次第にうまくなり、若狹鯖の鹽加減の好い

山科　京都府紀伊郡に在る村　京都市と大津市との中間

のが口に適ふやうになる秋も、これからはもうぢきである。

（都會と田園）

二二　富士登山

荻原井泉水

船津の宿で、大分後れた晝飯を取りながら、私たちは富士登山に就いて相談した。宿の主人に聞いて見ると、お山の天氣は心配なく夜にかけて益、晴れるとの事であつた。それでは登ることにしようと衆議が一決して、膳を撤するや否や快い興奮を感じつゝ、船津の町を離れた。

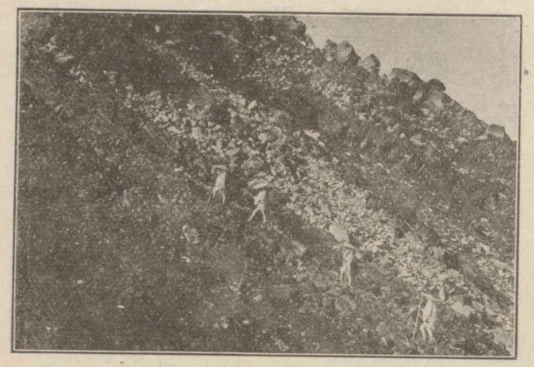
吉田は登山口の一つである。此處で登山の用意をした。先づ馬返しまで平坦な道が二里半、次に五合目まで上りが

荻原井泉水
名は藤吉
俳人

船津
山梨縣都留郡にある村
川口湖の東南岸にあつて吉田山中などに通す

吉田
山梨縣都留郡にある町
富士山の北口

一里、合せて三里半は馬が利くと。人數だけ馬を七頭傭ふ事にした。五合目から頂上までは、如何に急峻な路と云つても僅か一里半程である。たとひ這ふとしたところで、夜の中に登れぬ事は無い。



富士登山

頼んで置いた強力は來た。二十歳ばかりの青年であつた。馬は淺間神社の裏手に揃へてあるといふので、そこまで歩いた。

淺間神社の杉木立に鳴いて居た蜩も、もう聲を嗄し、時計の針は六時を指して居た。皆乘つた。

淺間神社
吉田口の富士山麓にある社

お山は實に鮮かに晴れて居た。夕陽の光彩を失つて、唯黑く隆々と盛り上つた偉大な土の堆塊が却て彫刻的な尊嚴を以て仰がれた。空は硝子のやうに透明で、ちぎれ雲一つの曇さへ無かつた。晝の光が消え失せたに拘らず、空氣そのものが光を持つて居るやうに薄青く暮れずに居た。路はお山へ向けて眞直について居た。馬は慣れきつた路を心得顔に、自分の好きな歩調で私たちを運んだ。此の邊の裾野は小松が多かつた。小松の中に秋草が樣々に咲いて居るらしいが、丈の低いのは皆夕べの色に埋れてしまつて、背の高い女郎花と路傍に近く咲いてゐる月見草とだけが暮れ殘つて居た。ふと西を見ると、今しも顔を出した明星がたつた一つ、ぽつちりと象嵌されてゐた。それは此の限ない野の廣さを支配する神の灯かとも見えた。又此の山の昔ながらの尊さを、其處に參ずる私たちに暗示する表象かとも思はれた。私は段々とうつすりした靄に包まれて行くやうな、あたりの景色を馬の上から眺めながら、そして其の目でじつと明星を見つめて居ると、何と云ふことなしに涙ぐましい程な、美しく寂しい感激が心にこみ上げて來るのを覺えた。

「おゝ月が……」。私は覺えず馬上で斯う叫んだ。それは東の空に低く、磨ぎ澄まされたまん圓い光が玲瓏と搖ぎ出た所であつた。月がさし出ると共に景色の調子は凡て一變し

た。今まで一樣に薄青かつた空や裾野は、くつきりとして光と影との二つに分れた。空は朗々とした光澤を帶びた。さうしてお山は愈、黑く大きな姿を以て現れた。其の半腹から上の方には、小さな寶石のやうな灯が點々として鏤められて居た。それは石室の灯であつた。路の上にも白い光が流れて來た、そして私たちの七頭の馬が長い黑い影を投げ始めた。

馬返し茶屋に着いた時は、夜氣を感ずる程であつた。是から山も高くなるし、夜も更けるからと强力が云ふので、私たちはメリヤスの肌着を着込んだ。榾の明りの暗い手許で饂飩を一杯づつ食べた。そして各自の馬に乘つた。「今夜

のお山は好いぞ。「こんな日和は今年になつて始めてだ。」馬子と茶屋の亭主とが、斯う話してゐた。

一合目から上は樹の茂みがある。月は大分高くなつたらしいが、枝がこんもりとかぶさつて居るので、路も暗かつた。先に立つて行く馬子が一人、提燈を點けて馬を導いて行く。後の馬は唯先の馬に續いて暗い中を行くのであつた。勾配も段々急になつた。それに岩や石が多いらしく、馬の蹄の音が戛々と鋭く鳴つて來た。さうして暗さの爲か、急な上りの爲か、馬は時々躓いた。さういふ時には、蹄鐵から火花が飛散つた。併し樹の枝の疎らになつて居る處では月の光が雪のやうに葉の上に積みたまつて、其の邊を明る

くしてゐた。又、ふつと茂みのとだえて居る處では、月の光が瀧のやうになだれ落ちて、路の上に溢れてゐた。さういふ處を馬は勇ましく歩を運んだ。

三合目・四合目の室はもう戸を閉ぢてある。その前を、ひつそりと乘りながら過ぎた。五合目に着くと、馬は心得たやうにぴたりと止つた。樹帶はこゝらまでゝ全く盡きて、月はお山一面を照して居た。私たちは馬を下りた。馬はしつとりと汗ばんで、水を浴びたやうに濡れた肌を月にさらしながら、大人しく足を揃へて居た。私たちは其處の室に這入つて熱い茶をうまく味つた。そして用意して來た夕食をたべた。室には宿泊してゐる人が、蒲團一枚を引掛けて、ごろ〳〵寢て居た。

五合目は「天地の境」と稱せられて居る。如何にも此のあたりまで登ると、地上を離れたといふ感じがする。吉田口から裾野を來る時、しつとりと薄い夕霧が襲つて來るやうに思つたが、それがもや〳〵とした白い雲となつて、此處から見ると低く裾野一面を蔽うてゐる。其の彼方に吉田の町の灯が近々とかたまつてゐる。

馬と馬子とを返した後の私たちは強力を先に立てゝ、靜かに一歩々々を踏んで登つた。此の山の夜を踏んで居る者とては實に私たちだけであつた。鳥も居ず、蟲も居ず、死のやうな靜寂の中に七人の金剛杖の音のみがかちり〳〵と

岩に當つて鳴つた。其の杖は五合目の室で「天地の境」といふ燒印を押してくれたものであつた。月は誠によく冴えて何の遮る物もない山の肌は、晝のやうに明るかつた。時計を出して見ると、十時を二十三分過ぎてゐる。其の針がはつきりと月光に讀まれた。

自分の服に觸つて見ると、露でしつとりと濕つて居た。吳蓙や笠は暑さを凌ぐ爲に身に付けて來たのであるが、それが今では露を凌ぐ爲の物となつた。山肌の岩や砂に縋つて生えてゐる僅かの青い物——偃松や濱梨の木や薊など——の葉にも露が光つて居た。空を見ると疎らな星が、大きな露の雫のやうにきら〳〵して居た。さういふ星がふ

つと流れて下界の方へ落ちたりした。其處から見ると白い雲が海のやうに浪立つてゐる、下界の方へ。

ベンチ Bench

石室

六合目の室はぴつたり閉ぢて居たが、其の前に差掛けのベンチが出來てゐる。其處へ腰掛けて休んだ。

頂上に近くなると共に、路と云ふやうな路が無くなつてしまふ。僅かに人が踏んだ跡の砂が、それと判るのであるけれども、踏み堅められてゐるのでは無く、足を掛けると、さくり〳〵と辷るので、歩みは著しく捗らなくなつた。「懺悔々々。六根清淨」。登山の

行者が唱へる此の言葉を、先へ行く者と後になつた者とがお互に呼び交して心を引きしめ合つて進む。

七合を越して八合の室に入つて少し休んだ。時計を見ると、もう一時を過ぎて居た。非常に眠い。山に醉つたと云ふよりも、寢不足の爲であらう、頭がふら〳〵する。さう云ふ者が私の外に二人あつた。自分の吳蓙を山の勾配のまに砂の上に敷いて、ごろりと寢て見た。砂の上には草一本の影も無い。月は丁度額の上に懸つて、愈天心に澄み切つて居る。頭を高く仰向けになつた視線のうつろな果に、北斗七星が爛々と光つて居る。私は其の一つをじつと見詰めて居た。と、其の星がふら〳〵動き始める。すうと流

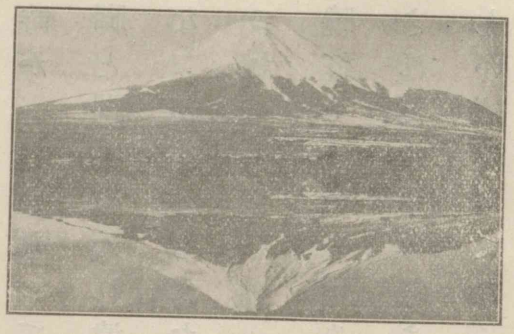
れるのでは無く、小さな螺旋形を畫いて躍つて居る。不思議だなと思つて、他の一つの星を見詰めた。すると其の星も亦螢のやうにゆら〳〵と舞ひ始めた。是は幻覺だ、さう思ふと眼の疲勞の激しいことが解つた。又月を見た、月の光が眩し過ぎて涙が滲み出した。

九合目には久須志神社といふ社が立つてある。其處へ這入つて休んだ。神職が二三人、「中々寒い、併し今朝は氷が張らないからいゝ。」などと、もう朝の言葉を交して居た。そして、日の出まではまだ二時間近くも間があるので、私たちは頂上で御來迎を拜むことにした。「頂上へ行く方は御祓をしていらつしやい。」神職は斯う云つて祝詞を讀んだ。そ

れは此の好き日にお山へ詣でる好き人々の一族の平安を祈ると云ふ意味を神代の長々しい言葉を集めて綴つたものであつた。さうして大きな御幣で皆の頭の上をばさりばさりと祓つた。外へ出ると、是まで感じなかつた風が冷え冷えと動いて居た。それが黎明の近い事を思はせた。又其の風がふら〳〵した頭を幾分かしつかりさせた。

月の光は漸く衰へ始めた。其の上、路が東に廻つた爲、西に傾きかけた月が頂の峰の陰になつてしまつた。光と影との差別は薄らいで、裾野の夕べに見たやうな、混沌とした青白い色が、一樣に漂つて來た。其の混沌たるもの〻中から新しい光の生れるのを待つばかりになつた。下界——殊

に甲州に寄つた方——は雲がぎつしりと鎖して居た。其の雲の外れに、今迄は雲と同じやうに白く見えて居たものが、大きな勾玉の形をした湖水であるといふけじめもやつと明かに認められた。それが山中湖であつた。私たちは斯うして鳥瞰的に此の湖を眺め得た。



山中湖

頂上の室ではもう灯を消して居たが、屋根の下は薄暗かつた。其處へ私たちは上つて御來迎を待つ事にした。じつとして居ると、寒さはひし〳〵と身に迫つて來る。手は凍えるし、吐く息も

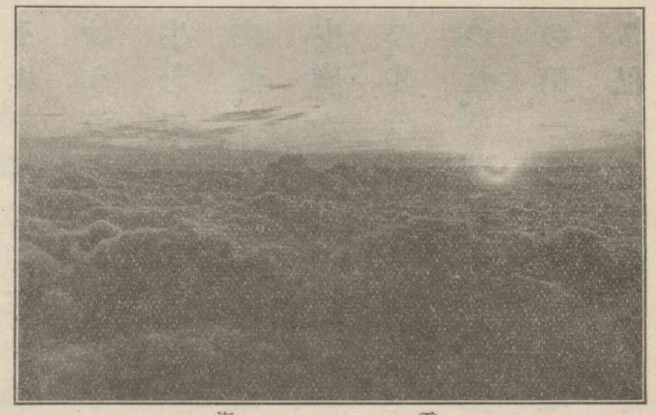
白く見えた。 褞袍を借りて被る者もあつた。 下の室を早く立つて來たと見える人々が、ちらほら登つて來て、室は何時か一杯になつてしまつた。 皆草鞋のまゝに上るのだが、脚と脚とを入れ違へて餘地も無いやうな處へ牡丹餅の箱などが並べられた。 名物といふ眞黑な甘酒だけはうまかつた。

曉紅！ 朝の始る前の先詞として、がんがりとぼかし染にされた水平の紅さは、斯うした高みから眺める時に、啻に美しいばかりでなく、地上の物の一切の希望を語つてゐるやうな純潔な尊さが滲み出てゐる。「あゝぢきに御來迎だ」。さういふ言葉が口々に傳へられて、室の中に居た者も皆外

に出た。 大分明るくなつた岩の上には霜が置かれて居た。それを踏んで寒さうな緊張した顏が並んだ。 水平の紅さはうつすりと吸取られて、雲では無いが或神聖なものゝ誕生を包んでゐる幕のやうな霞が、つや〳〵しい光を帶びて來た。——と、一點の輝いた朱の色が、鋭い刄物で突き破つた皮膚から滴る血のやうに霞の幕を押し分けた。 と思ふ間に、其の朱の一點が見る〳〵擴がつて麗しい太陽の姿となつた。 刹那、新しい光線は地上に、又天上に漲つて來た。 其の第一の光線が驀地に屆いたのは、此の頂上に立並んでゐる私たちの瞳であつた。

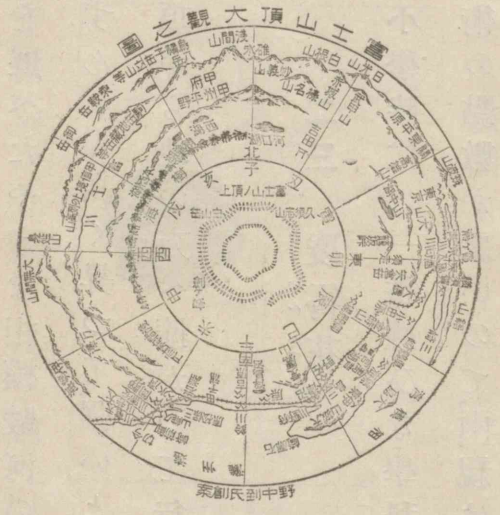
朗かな朝は來た。 大空は實によく晴れて居た。 大地も實

によく晴れてゐた。太陽を產んだ後の霞が消えた處に、煙の靡くやうに仄かに這つて居るのは房總半島である。海は空と差別は無いが、雲のやうに置かれた大島が、其處は太平洋の中だと云ふ事を示して居た。其の手前に更に鮮かに一抹の線を引いてゐるのが三浦半島である。海岸線に沿うて目を移すと、小さく而も靜かに江の島が見える。馬入川が見える。其の右小田原・熱海と思はれるあたりには、箱



雲海

根・足柄の山々と、盤に水銀を盛つたやうに蘆の湖が、外輪の器の中に祕められてゐるのも、手に取るやうに見える。近くは愛鷹山の靑い隆起を隔てて天城山を中央とする伊豆半島がどつしりと延びてゐる。其の右に洋々たる駿河灣が描き殘された繪絹の白さを以つて光つて居た。沼津・原・田子の浦と順々に南を眺めると、蛇の這つてゐるやうな富士川を越えて、三保の岬が小さく淸水灣を抱いて居る。其の先に突出してゐるのは御前崎であ



バノラマ
Panorama

吉村冬彥
本名寺田寅彥
物理學者
文學者
東京帝國大學教授
理學博士

らうか、そこらはもう霞んでゐる。私は此のパノラマのやうな景觀に心を放つてゐた。さうして私はさながら地圖を展べたやうな相模・駿河の平野を見渡してゐた。太陽はずん〳〵高く昇つて、強いとろ〳〵とした光線が、靈山の絶頂から地の方へ擴がつて行つた。（山水巡禮）

二三　凌霄花（のうぜんかづら）

吉村冬彥

小學時代に一番嫌ひな學科は算術であつた。いつでも算術の點數が悪いので、兩親は心配して中學の先生を賴んで夏休中私は先生の宅へ習ひに往く事になつた。先生の處までは四五町もある。宅の裏門を出て小川に沿うて少し行くと村外れへ出る。そこから先生の家の高い松が近邊の藁屋根の植込の上に聳えて見える。これに凌霄花が下から隙間もなく絡んでゐる。毎日晝前に母から注意されていや〳〵ながら出て行く。

らづかんぜうの

裏の小川には美しい藻が澄んだ水底にうねりを打つて搖れてゐる。其の間を小鮒の群が白い腹を光らせて時々通る。子供等が丸裸の背や胸に泥を塗つて小川へ入つて、ぼちやぼちやつて居る。附木の水車を仕掛けて居るのもあれば、盥船に乘つて流れて行くのもある。自分は羨ましい心

を押へて川沿ひの岸の草をむしりながら、石盤を抱へて先生の家へ急ぐ。寒竹の生籬を繞らした冠木門をはひると、玄關の脇の坪には蓆を敷き並べた上によく繭が干してあつた。

玄關から案内を乞ふと色の黑い奥さんが出て來て「暑いのにより御精が出ますねえ。」といつて座敷へ導く。綺麗に掃除の屆いた庭に臨んだ縁側近く低い机を出してくれる。先生が出て來て、默つて床の間の本棚から算術の例題集を出してくれる。横に長い黄表紙で、木版刷の古い本であつた。「甲乙二人の旅人あり、甲は一時間一里を歩み乙は一里半を歩む」といつた樣な題を讀んで其の意味を講義して聞

かせて、これをやつて御覽といはれる。先生は縁側へ出て欠伸をしたり、勝手の方へ行つて大きな聲で奥さんと話をしたりして居る。自分は其の問題を前に置いて、石盤の上で石筆をこつ〳〵いはせて考へる。座敷の縁側の軒下に投網が吊りさげてあつて、長押の樣なものに釣竿が澤山掛けてある。何時間で乙の旅人が甲の旅人に追ひ着くかといふ事がどうしても分らぬ。考へて居ると頭が熱くなる。汗が坐つて居る脚ににじみ出て、着物のひつつくのが心持が惡い。頭を押へて庭を見ると、笠松の高い幹には眞赤な凌霄花の花が熱さうに咲いてゐる。よい時分先生が出て來て「どうだ、むづかしいか、どれ。」といつて自分の前へ坐る。

羅紗切れを丸めた石盤拭きで隅から隅まで一度拭いて、そろそろ丁寧に説明してくれる。時々、分つたか〳〵と念を押して聞かれるが、大方それがよく分らぬので、妙に悲しかつた。俯向いて居ると、水洟が自然に垂れかゝつて來る。それをじつと堪へてゐる。愈落ちさうになると思切つて啜り上げる。これもつらかつた。晝飯時が近くなるので、勝手の方では皿・鉢の音がしたり、物を燒く匂がしたりする。腹の減るのもつらかつた。繰返して教へてくれても、結局は餘りよく分らぬと見ると、先生も悲しさうな聲を少し高くすることがあつた。それが又妙に悲しかつた。「もうよろしい、又明日おいで。」と云はれると、一日の務がともかくすんだやうな氣がして大急ぎで歸つて來た。宅では何も知らぬ母が色々涼しい御馳走を拵へて待つて居て、汗だらけの顔を冷水で清め、ちやほやされるのが又妙に悲しかつた。

（藪柑子集）

二四　美濃の隱家

岸上質軒

岸上質軒
名は操
著述家
明治四十年歿す

かねて期しつる事ながら、昨日まで纏ひし綾羅錦繡を荒栲衣と着かへしのみかは、水汲み薪樵る業助くるは、唯一人の老僕なれば、山風寒き埴生の小屋に、良人に事へ、兒をはぐくみ、炊ぎ洗濯に日を暮し、夜は孤燈の下に、麻紡み絲繰りつゝいとまめ〳〵しく勞きけり。されど生ひ先望ある幼兒た

ちの、賤が子等と遊び連れて、餘念なげなる樣を見ては、流石に優しき親心の「あはれ由緒ある武士の兒と生れながら、一生を花咲かぬ埋木となしはてん事のかなしさよ。」と歎かれて折々は手織布子の狹き袂を濕しけん。

幼き兄弟は以前の榮華を忘れ果てゝ、獵師・木樵の子等に馴れむつみては、己れも亦先祖代々の山賤の如く覺えて、母が苦心を知る由もなく、日々野山に遊びくらしつゝ、見やう見まねに兎逐ひ柴こる業さへ覺えて、互に友とし行きかひけり。

處の子等は、山刀・鍬・鎌の外見しこともなき眼に、あてやかなる具足調度など見出でて、歸りて親々に斯くと物語れば、物識めきたる老人どもは「さてこそ彼處の浪人殿は確かに京の歴々が、流されて來られたに相違あるまい。兄弟の兒も母ぢやの躾が良いやらして、わるさはしながら行儀がよいぞ。」と鼻うごめかせば、「深い山には猪・鹿の種は盡きぬに痩せても枯れても京の歴々のはてとあれば、金の茶釜の一つ二つはあらうも知れぬ。」と何心なき里人の風說を、いかにしてか野伏・山立どもの聞きしりたりけん、「さらば彼の家には金銀もあるべく、財寶も多かるべし。好き隙あらば忍び入りて我等が榮耀の元手にせん。」と、竊かに談らひたりとは固より誰も知るよしなかりき。

主人稻葉正成はかりそめの風の心地して打臥したるが、思の外に病勢つのりていといたう衰へたり。さらでだにか

ひがひしくまめやかなる福女は、良人の病に罹りけるより日夜帶をも解かぬ看病に、すこしも怠なかりけるが、其の誠心の通じたりけん、「今宵は熱も稍低うなりしと覺えて、心ちもさまで苦しからず。御身は晝夜手一つの看病に、さこそは勞れ給ひぬらめ。暫しが程だにまどろみて、身をいたはり給へ。」と情ある良人の言葉、むげに否まば、なか〳〵に病の爲に惡しかりなんと思ひければ、「さらば暫しが程御免あれ。」とて、久々にて己が臥床に入りぬ。

されど病む良人が事、幼兒の上、生憎に心にかゝりて、夜は更けぬれど眼も合はず。折しも冴ゆる山風につれて、遠寺の鐘のきこゆるを數ふともなく數ふれば、草木も眠る丑三つ

なりけり。傍を視れば頑是なき幼兒の、寐顏に笑を含めるは、如何なる夢路か辿るらん。さてもかゝる片田舍に人となりなば、いつの日か成り出づる期あらんなど、又も來し方行く末の事など思ひ出でて、眼はいよ〳〵さえまさり、思はずも太き息のつかるゝを、病める良人に悟られじと、强ひて夜着引被きて睡れる樣を裝ひけり。

春日局（東京麟祥院所藏）

らばらと足音立て、はや眼の前に立ち現れたる四人の黑き折しも、枕邊の雨戸がらりと開きて、ば

影は、問はでもしるき曲者なり。あまりの意外に驚きて、跳ね起きたる福女、「何者ぞ。」と聲かくれば、「問はるゝ迄もなし、夜の稼をする者なり。今宵夜更けて音づれたるも、此の家に蓄へたる金銀財寶の有らん限を申請けんためぞ。命惜しくば、資財殘らず出して我等に捧げよ。否まば病みほうけたる此の家の主人を血祭せん。」と、簀子荒らかに踏鳴らして、息まきかゝるに福女は露ばかりも慌て騷げる氣色なく、「さる儀ならば無用なり。主人の病めるを窺ひて、女と侮り入込みたる野伏のしれものども、そも我を誰とか思へる。明智殿の御内に鬼と呼ばれし齋藤内藏助利三が息女、今は稻葉佐渡守正成が室と知らざるこそ愚なれ。汝等如き盜賊に、塵一つだに取らすべきかは。無禮の振舞其處動くな。」といひも終らず、床に懸けたる紀正恆が鍛へに鍛へし業もの の大太刀おつ取り、矢庭に二人を斬つて捨て、猶も漏らさじと斬立つるに、殘れる二人は慌て惑うて、逸足出して逃去るを、福女は追うて庭口まで出でたりしかど、如法闇夜に紛れていづちいにけん、跡追ひかけん術なきのみかは、病める夫の上、幼兒の上、痛くも心に懸れば取つて返しぬ。

この事誰いふとなくうはさに上りて、「さては心ざまの雄々しく賢しきのみにはあらで、武藝また世の人に勝れておはしけり。かへすがゝもいみじき女性よ。」とて、人々に語り繼ぎければ、盜賊ども聞きおぢして、其の後は隙窺ふこともあ

らずなりぬ。

福女とは誰ぞ。これぞ後には賢女の鑑と仰がるゝ春日の局その人なる。（春日局）

二五　蟲の音

沼波瓊音
名は武夫
文學者
第一高等學校教授
昭和二年歿す

私は一年の中で秋が一番好きである。「なぜ生きてゐるか、どういふ目的で生きてゐるか」と問はれると、「秋を味ふのが生存の一つの目的である」と答へたい位私は秋を好む。そして私が秋に對して感じる心持はどうかと云ふに、荒立つた後に來る澄んだ心である。例へば悲しいとか腹立たしいとか、感情が烈しく動いた後に、非常に靜かな落着いた氣持になる。其の荒立つた感情ののちに來る心持、それが秋にでも喩へようか。とにかく、細かく優しく、そして澄んだ感じである。さういふ心持が秋の風物にはどんなものにでも現れてゐる。見るものでいふと、日の光・雲・草花など。香でいへば木の花。觸覺では冷たい風。聽覺では蟲の音。中でも蟲の音に秋の感じが最も深い。

耳に觸れるものでは、春はいろ〳〵な小鳥が鳴く。又夏の晝には蟬が鳴くけれども、蟬の聲は却てうるさいものである。秋の蟲の音を聞く心持は、春の朧夜に鳴く蛙の聲を聞く心持にも比べられるが、蛙の聲は單調で、蟲の聲ほど複雜な、豐富な、そして細かな感じを起させない。其の點に於て

蟲の音は最優等で、さきに述べた秋の感じなり、味を現してゐる。小鳥の聲だとか、蟬の聲だとかは、外的とでもいふのか、外に現れるやうな趣を持つてゐるが、蟲の音は內的である。蟲の音を聞くと、心の眼が內に向つて開くといふ趣がある。

蟲の音は、俳句では秋の季題になつてゐるが、實際は土用の中から鳴初める。それも好い。秋に入つて、月夜に鳴くのも好く、闇夜に鳴くのも好い。又聞きながら眠に入るのも好く、夜中にふと目覺めて聞くのにも趣がある。朝早く聞く、晴れた日の晝間聞く、雨の降る日に聞く、それ〴〵異つた情趣があつて、何れも好い。殊に夜汽車にでも乘つて行くと、或寂しい驛へ着いて、ふと蟲の音を聞くことがあるが、旅のあはれも一入に覺えられて、深い味がする。又夜の銀座の明るい賑やかな通りを歩いてゐて、細い暗い露地に入ると、足許で蟲の音がしてゐる。更に趣が深い。

それから秋の夜な〳〵蟲の音を聞き馴れてゐたのに、冬の初になつて、全く何の音もしないのに氣がつくと、たゞならぬ寂しさを覺える。（しら椿）

相馬御風（名は昌治、文學者）

二六　月見草

相馬御風

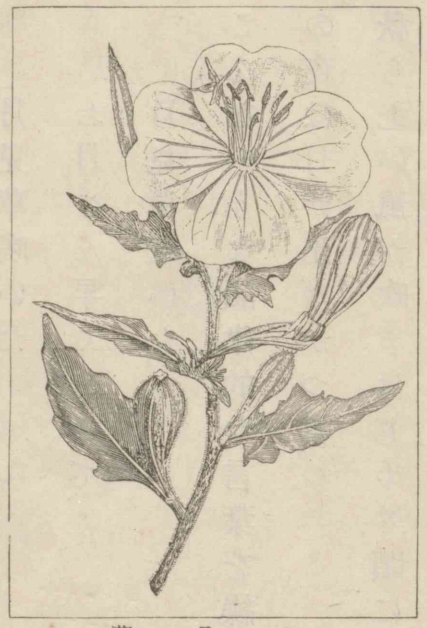
夏咲く花のうちで、私は月見草を最も好きな花の一つに數へてゐる。夕べに咲き晨に萎み、夜毎に咲き代るあの花の

あのつゝましやかな優しさを私は愛する。あの寂しい安らかさを私は愛する。あの花の淡い黄色は日光を思はせる。

越後の海岸の砂山では、六月からあの花が咲きはじめて、秋風のやゝ肌寒く感じられる頃まで咲きつゞける。砂山越しに波の音を聽きながら辿る夕ぐれの松林の中の細道などに沿うて、あの花ばかりがほのかに暮れ殘つてゐるのを見たりすると、私はいつも一種の快い寂しさを感ずる。晝の光に堪へないで、夜を待つて咲くあの花の運命は、何とした寂しいことであらう。

さうした寂しい運命を擔つてゐながら、あの花の繁殖力の

盛なことも、私にはおもしろく感じられる。去年の夏の初めに丘から僅か三株だけ根こぎにして來て植ゑた私の庭の月見草も、今年は十株以上に殖えた。そして夕暮毎に、私の貧しい庭に、しんみりとした風情を添へてゐる。



月見草

「月見草お月さんを好きなの？」

かう私の五歳になる女兒が或夕方私にたづねた。

「さうだ。月見草はお月さんが好きだし、お月さんは又月

見草が好きなんだよ」と私は答へてやつた。すると彼の女は又或夕方庭に出て月見草の咲くのを眺めながら、

「月見草咲いた、
お月さん早くおいで、
月見草咲いた」。

こんなやうな韻律的な言葉を繰返したりした。しかし、その夜は月が出なかつた。

秋らしい風が吹きはじめる頃になると、晝になつても月見草の花は萎まない。殊に磯山陰のほのぐらい森林の中などでは、午後になつてもそのまゝ咲いてゐる。さうした白日のもとに咲いてゐるあの花を見ると、何となく見殘した夢を追うてゐる人の寂しい風情が聯想されたりする。そしてそれにはもう夜見る如き安らかさも、つゝましさもない。むしろ一味の痛ましさをさへ加味したあはれさがある。夜の花はやはり夜の世界に於てのみ見るべきであるといつたやうにさへ思はれる。（野を歩む者）

中勘助
文學者

二七　葛飾の秋

中　勘　助

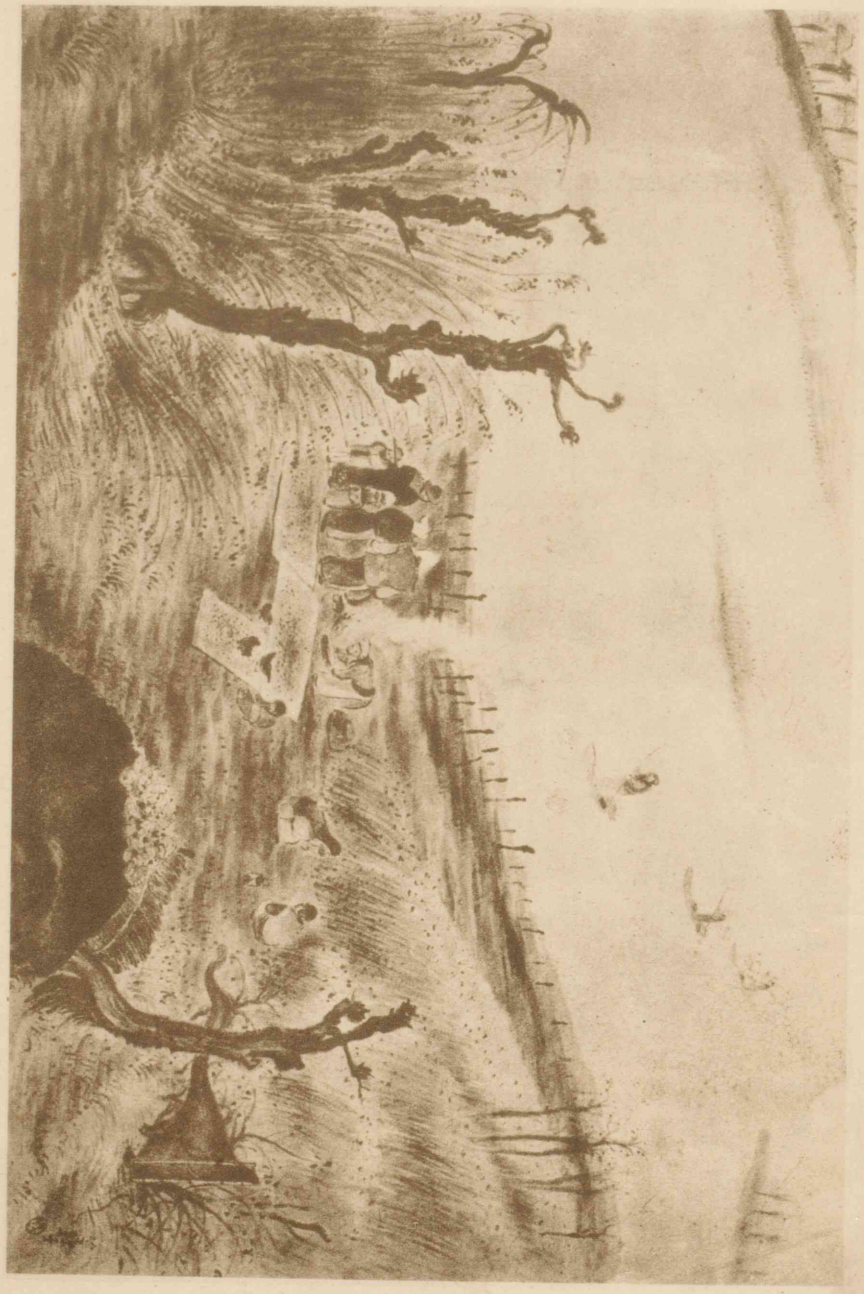
九月十五日

秋になつた。冷い雨がふる。ところ〴〵に鳴子が立つて鳴つてゐる。その原始的なしかけと、いかにも秋にふさはしいから〳〵した音がすきである。

このへん
千葉縣東葛飾郡
手賀沼のほとり

このへんはみんな早稲を作るし、それに氾濫のためもあつて、かなり前から稲刈が始つた。到る處掛稲の張られるのも間もないであらう。さうすれば田は寂しくなる。蜀黍の穂も秋の色になつた。朝々百舌が宰領顔にかしましく鳴きたてる。その鋭くけたゝましい叫のなかにも秋のさびがある。私の好きな椋鳥がるい、るいと喉を鳴らしながら欅の梢でなにか食つてゐる。

秋になつた。
椋鳥が柿を食ひにくる。
るいぐる、るいぐる。
おい〳〵椋公、



小川芋錢筆

水郷

同勢揃つてみんな食つちやつちやひどいぞ。

おれだつて食ひたいよ。

荔枝(イシ)もなつた、無花果(イチヾク)もなつた。

だがおれも柿が食ひたい。

やつぱりおれも椋鳥か。

九月二十九日

かつしかの沼べに秋の風ふけば、

蜀黍の穂もさびしきものを。

十月三日

つゆのやうに秋雨がふりつゞく。しと〳〵しと〳〵とを

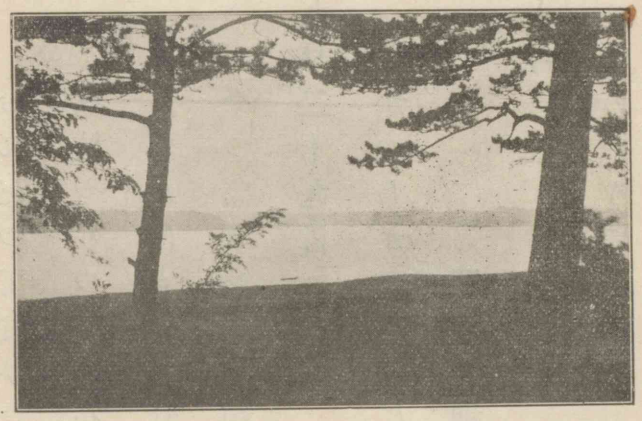
やみもない。沼は田二枚ほど氾濫して、鮒つりや、掛稻を運

ぶためにそこを田舟が往來する。葦の花がさいた。かいつぶりが雛をつれて親船が浮(ハシケ)をひくやうに泳ぎまはる。

芙蓉は散りすぎた。遲蒔きの藤(フジ)豆(マメ)の花ばかり白く淸げにさいてゐる。

一月あまりも前のことである。

曇つた日に子(ネ)の神(カミ)へ散歩して高臺の畑路を歸つてきたとき、沼から立つたらしい一羽の白鷺(サギ)が北へむかつてかなり低く飛んでゆくのをみた。久寺家(クゲケ)から



手賀沼

子の神　手賀沼の西岸の臺地にある堂十二神將の子の神を祭る

牛久の沼　茨城縣稻敷郡にある沼

牛久の沼へでもいつたのであらうか。子供の時分には白鷺もあまり珍しくはなかつたが、近頃はめつたに見かけなくなつた。人間はいろ〳〵なものを征服して結局自分が寂しいつまらぬものにならうとしてゐる。鶴も鸛(コウノ)も跡を絶つた此の頃では、あの長い脚をうしろへ伸ばして、たをたをとあてやかに羽打つてゆく鳥は白鷺ぐらゐなものであらう。またその日私は舟で沼へのりだして鷗――の一種だと人がいつた。――の形をよく見ることができた。都鳥などよりは小さく、圓みをもつて、白い玉みたやうなかはいらしい鳥だつた。いつも二羽で追ひ合つてゐる。いつからか葦のなかでぴよつ〳〵と鳴いてゐたのはこれであつ

た。燕がいつて野らは寂しくなつた。飛びかひ囀りかはす輕快な姿が見えない。雁は聲ばかり、鴨もまだ來ない。おしやべりな行々子は消えてなくなつたか、こそともいはぬ。百舌のやつ、椋鳥のおやぢ。

豆をうち、稻を刈りほし、栗をとり、

手賀の沼べは秋ふけにけり。（沼のほとり）

新定女子國文卷三終

昭和三年二月二日
文部省檢定濟
高等女學校國語科用

昭和二年三月二日 印刷
昭和二年三月二日 發行
昭和二年三月二日 再版印刷
昭和二年三月二日 再版發行

新定女子國文
〔全十冊〕

定價
卷一、三、四、十 金四十錢
卷二、 金三十九錢
卷五、六、七 金三十七錢
卷八、九 金三十八錢

昭和三年臨時定價
卷一、三、四、十 金六拾六錢
卷二 金六拾五錢
卷五、六、七 金六拾一錢
卷八、九 金六拾三錢

不許複製

著作者 吉田彌平

發行兼印刷者 東京市神田區美土代町三丁目一番地 金港堂書籍株式會社

代表者 原安三郎

印刷所 東京市牛込區榎町七番地 日清印刷株式會社

發賣所 東京市神田區美土代町三ノ一 振替貯金口座東京八八一五番 金港堂書籍株式會社